
悪役上等！ 武装戦闘国家ゼクトール

アズマダ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪役上等！ 武装戦闘国家ゼクトール

【Nコード】

N0753Z

【作者名】

アズマダ

【あらすじ】

もしも、高校生が絶対君主制国家の国王になったとしたら？

そして、国民における女の子率が、異様に高かったとしたら？

さらに、国民の生与奪権が国王にあったとしたら？

そのうえ、主人公を補佐するのが幼なじみの少女で、その子が暗躍しまくったとしたら？

あまつさえ、その国が滅亡の危機に瀕していたとしたら？

その危機を救えるのは？

よーし、まじめにいつてみよう！

1・二ホン

序・

白い指だ。

細くてしなやかな少女の手が、白い砂に埋もれかけた写真を拾い上げた。

端が焼けこげた大判の写真。

細くて華奢な少女の手が、白い埃を丁寧に払いのける。

どこかぎこちない笑顔で収まる、十一人の集合写真。

中央に映っているのは、夏の制服を着た少年と少女だった。

1・二ホン

「ちよつと桃矢！」

怒りにまかせた幼馴染みの声と共に、A4サイズの雑誌を入れた紙袋が、桃矢の後頭部に直撃した。

芦原桃矢は、言い返したい言葉を飲み込んで、頭を抱えうずくまる。おさまりの悪い毛が一本、指の間から飛び出して左右に揺れていた。

「デートしてた女の子に対して、何も言わずに先に帰るってどうよ？ それでも健全な高校生？ 十七歳男子？」

雑誌を拾い上げ、砂埃を丁寧に払い落とした後、きはたもか騎旗桃果は不平を口にした。

「デートって、……桃果ちゃん。学校の帰りに寄った本屋でフランカーの特集号を食い入るように立ち読みしてたのは誰ですか？ ロシア製新鋭戦闘機を穴が空くくらい眺めてるだけのデートなんて初めて聞いたよ」

アドレナリンが誘発した汗が、桃矢の額を濡らす。汗を拭う手が、意図的に長く伸ばした前髪をかき分ける。髪の間から大きなホクロが顔を出す。綺麗な五角を持つ星形の珍しいホクロだ。

ホクロが空気に触れたことを察知した桃矢は、慌てて前髪を下ろす。

「お！ 桃矢の恥部を見るの久しぶりね！」

桃矢は、嫌そうな眼で桃果を見上げる。

夕方とはいえ、まだまだ力を保ったままの太陽。その陽光を背にした桃果は、光の中にいた。

夏の制服がよく似合う桃果。スカートのプリーツを透かして、形よい足が見える。

桃果は無邪気に笑っていた。

何物にも代えがたい輝きの笑み。このかわいい笑顔を見たいが為に、同年代の男共は身の程を超えた努力にいそしむのだ。

生まれたときからの付き合いを誇る桃矢でも、時々だまされなくなる太陽のような笑顔。

道行く十人が十人とも振り返るほど可愛いんだけど……中身を知ってる桃矢は素直な反応をよこさなかった。

「戦闘機の写真集だから痛かった？」

背中まで伸ばしたサラサラの黒髪を指ですくい上げる桃果。

いまだ痛みを引きかない頭頂部を片手で押さえている桃矢。

「写真は鉄の塊のを撮ったんだろうけど、媒体は紙だからね」

「じゃ、痛くないわね。さ、帰る帰る！」

話は済んだとばかりに、ズカズカと歩を進める桃果。

桃矢には、そのいい加減さに思い当たる節があった。

「桃果ちゃん。ご両親さあ……」

「言わないで！」

先程までのおどけた空気がない。桃果は、ぴしゃりと桃矢の言葉を封じた。

桃矢は肩をすくめてから歩き出す。桃果も、無かったことにして先を歩いている。

毎日の毎回の繰り返し。いつの間にか、いつもの終わりが始まっている。

角を曲がれば桃矢の家。向かいは桃果の家。

角を曲がれば……。

「あれ？」

「なによ？」

曲がったとたん、桃矢が立ち止まる。芦原家の前に止まった、黒塗りの大型車が一台。

車の周りには、ガッチリした体格かつ黒服の男達　ならぬ、グレーの制服が三人。

「軍服……のコスプレ？」

桃矢の頭の中をいろんなアニメ雑誌記事が、回り灯籠のようにゆっくり回転している。が、見覚えのないデザインだ。

灰色の男達の背後から、四つめの影が現れた。同じデザインの軍服を着ているが……。

線が細い。

桃矢と同一年であろうと思われる、背筋を伸ばした美少女が、七分の構えで立つ。

後ろになでつけた短い金髪は絹のように細く、アイスブルーの目が底抜けに冷たい。

どのような混血の結果か？ きめの細かい浅黒い肌が、彼女の人種を複雑にしていた。

「トーヤ・アシハラ様……ですね？」

「は、はい」

それを合図に、男の一人が車の後部ドアを開ける。と、同時にエンジンがかかる。

これはまずい。大変まずい展開だ。桃矢の脳裏に「拉致」の一言が浮かぶ。

「初めまして。わたくしミウラ・ヴァイツと申します」

肩パット入りの制服とタイトミニが、凛々しくも美しい。

「事は急ぎます。トーヤ様、我らとご同行願います」

両脇を灰色の男達にガツチリつかまれた。万力で腕をはさまれた感覚。もがいてみるが微動だにしない。

「ちょっと、あなた達誰よ？ ここは法治国家日本よ！ 最近この近くで誘拐事件があつてね。この辺、警察のパトロールが頻繁なのよ！」

桃矢と車の中に立ちふさがる桃果。こついう時に機転の利く、頭の回転が速い子だ。彼女を頼もしく思う時点で、男失格だと思う桃矢。

敵つい男が、丸太のように太い腕を伸ばし、桃果をよっこらせと脇へ退かす。

ミウラと名乗る少女は、微笑みもしなかった。

桃矢は、鏡で自分の顔を見たくなかった。我ながら情けない顔をしているだろうと思う。

「だめよ！ 桃矢はこれからあたしと百里へ、イーグル見に行くのよ！ 先約よ！」

「そんな約束してないって！ 僕は軍事オタじゃないから」

桃矢とミウラの両方から無視される桃果。だが、負けない。

再び、前に回り込む。

「これを見なさい！ このひもを引き抜くと警報が鳴って警察が大挙して押し寄せてくるわよ！ そうならないうちに桃矢を離しなさい！」

桃果が持っているのは白い携帯と、訳あって表現できないが、世界一有名なビーグル犬のストラップ。引き抜いたところでブザーは鳴らない。お子様携帯であるわけでなし、もとよりそんな機能はついていない。

ミウラはまじまじと桃果を見つめている。

「さあ、どうするの あ！」

桃果の携帯は、手首のスナップを利かせたミウラの猫パンチではたき落とされた。

「ああっ、ちよっと！」

嫌な音を立てて落下した携帯を拾い上げようと、慌ててしゃがみ込む桃果。

「ああああ、ちよっと！ ちよっと！」

一方、宙ぶらりんになった桃矢。抵抗虚しく、コンパクトに車の

中の人となる。

と、窓の外に母の姿を見た。

「お母さん！ 助けて！」

車の中から大声で叫ぶ桃矢。

偶然か神の思し召しか。うまい具合に母と視線が合った。

「行ってらっしゃい。体に気をつけるのよ！」

笑顔で送り出す母。手を振っている。

店の奥から、父が姿を現した。

「父さん！ 助けてー！」

ウインクしながらサムズアップする父。キラリと光る白い歯がとてもダンディ。

「どういうことーっ？」

桃矢のいつもの日常は、あっけなく幕を閉じたのだった。

有無を言わず空港へ。国際線の大型ジェットに乗ること十数時間。
問。

さらに、一回り小さいジェット旅客機に乗り換えて数時間。もう一度乗り換えた三十人乗りのプロペラ機が水平飛行に移った時、たまらず桃矢が口を開いた。

「あの！ 僕どうなっちゃうんでしょうか？」

対して、大きく目を見開くことで答えるミウラ。

「どつつて……トーヤ様、なにがどうなのでしょうか？」

桃矢は理解した。話が噛み合っていないのを。

「何で僕が拉致されなきゃならないんですか？」

ミウラは微かに口を開いて動かなくなった。目の光も鈍くなっている。

桃矢が待つこと十数秒。状況を判断しおえたのか、ミウラの目に再び明かりが灯る。

「ひよつとしてトーヤ様、ご両親からは何も聞いておられないのでしょうか？」

自分のことを「様」付けで呼んでもらっているところを鑑みるに、可及的速やかな危機はなさそうだと、なると、桃矢にも、ある種の感情が自然発生する。

ズバリ、その名は怒り。

「だから、何が何だか解らないから聞いてるんですって！」

「アイヤウエイ！」

母国語であろうか？ 聞いたことのない単語を口走り、左手を額にあてるミウラ。なにか重大な齟齬をきたしたらしい。

ミウラは居住まいを正した。

「トーヤ様。数々のご無礼お許し下さい。改めて全てをお話しいたします」

一旦言葉を句切り、ミウラは視線を前後左右に素早く走らせる。その仕種につられ、桃矢もキョロキョロとあたりを見渡した。

いつの間にか、灰色の大男がいなくなっている。その代わり、不自然な人が増えていた。

アロハシャツを着た人の良さそうな老人が、紙コップに入ったコ

ーヒーをすすっている。新聞を広げる背の高い婦人。居眠りする老婆。難しい顔をして窓を睨んでいる中年女性。

人種はバラバラだが、ミウラの軍服を気にしている人は一人もない。

これはっ、全て同じ穴のムジナっ？

「我らが母国の名はゼクトール。ゼクトール王国と申します」
姿勢の良いミウラがさらに姿勢を正す。

桃矢は、初めてミウラを正面から見据えることになる。小さい顔。日本人離れした美しき風貌。……日本人ではないが。

威風堂々としたその態度、とても同年代には見えない。

桃矢はミウラの瞳の色、アイスブルーが、色に等しい温度をもったように感じた。

「トーヤ様はゼクトールの次期国王なのです」

この間、きつちり三秒。

「はい？」

いまいち、よく聞き取れなかった。

「トーヤ様は、ゼクトール民主主義国前国王ゼブダ・バルギトル・ゼクトール様の跡継ぎなのです」

「えーと、……いい病院紹介しましょうか？」

「言い直しましょう。前国王が身罷られた今、トーヤ様が次期国王に決まったのです」

「なんですとおーっ！」

前の席から身を乗り出して叫んだのは桃果であった。

1・ニホン（後書き）

今回、そんなに深く考えていません（w）
女の子も、百万人は出てきません（笑）
全40話程度の予定です。

2・ゼクトール

「な、なんで桃果ちゃんか？」

桃矢は自分の身の上話より、桃果が、今ここにいる事に強く疑問を感じている。

「るっさいわね！ そんなことよりあなた、ミウラ！ 続きを早く話しなさいよ！」

目を大きく見開いたまま、しばし動揺を隠せないミウラ。その間のミウラは年相応の顔をしていた。ついでに言うと、周囲の一般人らしき人々も中腰になっていた。

ミウラは、桃果の気迫に押されるようにして話を続ける。

「ゼクトールの前国王には、お子様がございませんでした。つまり、息を引き取られた時点で、王家の直系が絶えてしまったのです。傍流のお血筋で、王位継承にもっともふさわしい条件をそろえておいでなのがトーヤ様なのです」

桃矢の感覚は麻痺していた。理不尽な出来事に続いて、極度の緊張を持続させたためか、情報の入り口が狭くなっていたのだ。

桃果の手が伸びたのに気付かない。そっと伸びた桃果の小さい手が桃矢の額をさわる。そして、桃矢の伸びた前髪をかき上げた。

「これね？ この星形のウルトラビームね？」

「いや、あのね桃果ちゃん」

こういう我に返りかたは嫌いだった。

「それです。ゼクトール王家の血を濃くひく方々に、たまに現れる遺伝上の特徴です。星形のお印を持つ方が、最も初代に近いと言われています」

桃矢のデリカシーなど問題外の事らしい。

「でもさ、僕は日本人顔だよ。両親も日本人だし、両方のお爺さんお婆さんも日本人だよ」

桃果の手を乱暴に払い、前髪を元に戻す桃矢。

「第二次世界大戦末期、我が祖国ゼクトールへ侵攻した日本軍が、両国親善のためと称し、王家の姫君、キリア・ウハウハ・ゼクトール様を日本へ連れ去られた。その姫様がトーヤ様の曾お婆さままでございます」

「さすがに三代前は聞いてないな。……つか、そんな話が本当にあったらマスコミが喜んで大騒ぎしてるよ!」

笑顔を浮かべようとしたが、頬が引きつっただけだった。

「その部隊が目的不明の秘匿部隊であったこと。部隊が撤退中に、連合国軍の攻撃で壊滅的打撃を受けたこと。生き残りが姫様を託した輸送部隊に、トーヤ様の曾お爺さまがおられたこと。そのあと、生き残りの方々が、姫君を落ち延びさせるため特攻攻撃を掛け、全滅したこと。等々、いろんな事が重なり、表に出ない史実として闇に埋もれていたのです」

一般人を装う乗客達は、普通の乗客に戻っていた。ただ皆、一樣に沈痛な面持ちであった。その事が、マシンになりきれない彼らの国民性を物語っているのかもしれない。

「隔世遺伝ってヤツ?」

桃果の問いに、うなづくミウラ。ミウラの瞳は力強い光に満ちていた。しかし、今までとは違った光。強い忠誠心に満ちあふれた従順な家臣のもの。

「ふっ！ 仕方ないわね」

まったく、桃果は空気を読まない子だ。桃矢はいらだちを覚える。恐れ以外の感情が桃矢に現れた。それは周りを見つめる余裕ができた証拠なのだが、彼は気付かない。

「わたしが桃矢王朝の為に一肌脱いでやるうじやないの。で、どこよ？ ゼクトールとかいう国の場所は？」

腕を組んで鼻から荒い息を吐く桃果。口をあんぐりと開ける桃矢。

桃果はこの状況を受け入れている？ なにゆえ？

「えーと、桃果様でしたわね？」

元の冷たいアイスブルーに戻ったミウラ。警戒心を露わにした言葉は冷気を帯びている。

「桃果様は、早々にお帰り願います。ご近所の幼馴染みというだけでは、おつきあい願えません。第一、ご両親が心配なされています。お電話でもなさいますか？」

ニコリともしないミウラ。ごつい携帯を桃果に渡す。恐らく軍用と思われる。

「大丈夫！ そんな必要ないわ！」

腕を組み、傲然と笑っている桃果。頭が天井へ付きそうになるところを見ると、座席の上に立っているのだろっ。

「だ、だめです、それでは理由になりません！ ご両親と、よく話し合ってください！」

眉間に皺を寄せ、困った顔をするミウラ。何にこだわっているのか。

「いいのよ、あんな連中！」

「家族は大事にしなければなりません！」

桃果の言葉にミウラが即反応した。反応の早さに桃矢が驚いた。ミウラの絡みようは、道徳心だけから来るものとは思えない。酷く真剣な眼差しだ。

「あたしに家族はないの！ あたしの両親は離婚したの！」

ミウラの動きが止まった。

新聞を読んでもる人も、コーヒーをすすってる人も、動作を止めている。

機内の空気が堅くなった。

「夕べ離婚届に判子を押ししたわ。あたしが立会人よ！」

「やっぱりだめだったの？」

家は隣同士、高校は一緒。桃矢は、ある程度の成り行きを知っている。お人好しの桃矢は、自分の身に降りかかる不幸を脇に置き、桃果の今後を心配している。

「お父さんもお母さんも、家や家族を守るつもりなんて、最初からこれっぽちも無かったって事よね。やっと家族が終わったって。そんなこと言ってた」

いつものような、明るい笑顔を見せている桃果。

桃矢の目には無理をしている様に映る。こんな場合、どう声をかけてやればいいのか？

「親御さんは子供のことを、あなたを必ず愛しているはずです！ だから、諦めずにもう一度お話しすべきです！」

言葉を紡いだのはミウラだった。

クールビューティは眉を寄せていた。なにゆえか、ミウラは桃果の家庭を心配していた。

「親を好きにさせてやるのも子供の愛情よー！」

指を一本立て、チチと左右に振る桃果。

「しかし」

家族にこだわるミウラを桃果が遮る。

「あたしは、絶対に家族を守りきる大人になるわ！ 死ぬまで家族を終わりにしない！」

太平洋高気圧のような凄みのある笑み。桃矢の目には、それが痛々しく映った。

「ところでミウラさん？」

桃果は座席から、いきおいよく飛び降りた。

「あたしは騎旗桃果。彼は芦原桃矢。二人とも名前に桃が付いている。なぜだかわかる？」

桃果は話の方向を意図的に反らしている。ミウラのアイスブルーに興味の色が浮かんだ。

なぜだか？ と言われても説明に困る。大それた理由などないからだ。じつは、先に生まれた桃果の「桃」の字を気に入った桃矢の母が、こじつけで付けた名前だったのだ。

「我が騎旗家は明治の御維新からこっち、ずっと芦原家嫡男の護衛を務める家柄なの！」

いや、いやいやいや。芦原家が先祖伝来住まいしていた土地に二十年前、騎旗家が越してきたのだし、次男の桃矢は嫡男じゃない。兄が一人いるし。

そんな関係は成立しない。

「十七年前に星形のホク口を額にもって生まれた男の子。偶然同い年に生まれたあたしと桃矢は等しく育ち、等しく教育を受けてきた。それはね、桃矢の考え方を理解し、力添えをする為よ。いわば、あ

なた達とあたしは同志なのよ！」

二人は同じ年だし、同じ高校に通って同じ教科書を持っている。桃果の言葉に嘘はない。嘘は言っていないけど、本当のこととも言っていないパターン。

さすがに桃果を見てられなくなった桃矢。ミウラの顔色をうかがった。

彼女は目を見開き聞き入っていた。意外と素直な少女である。

いやいやいや、腐っても軍人……腐るほど年取ってなさそうだが……、そんなフェイク、ミウラが信じるわけないだろう？

「どうかご協力お願いします」

頭を下げるミウラ。白く固まる桃矢。

「任せなさい！」

ますます鼻息が荒くなる桃果。そこそこに豊かな胸を反らしているのだった。

2・ゼクトール(後書き)

さてさて、話が走り出しました。

ついでにポチッと評価ボタンを押してください。

3・コバルトの海

「ところで、ゼクトールって王制を敷いているところから見ても絶対君主主義国家？　ねえ、軍事国家でしょ？　戦闘機は何を採用してるの？　ミラージュ？　それともF？」

たたみ掛ける桃果に押され気味のミウラ。

「えーと、ミゲ」

「あーそっち系ね、はいはい！　小さい国特有ね。いいわいいわよ、あたし向きよ！」

桃矢は、あきらめ顔で飛行機の天井を見上げた。

やれやれ、どこでも桃果ちゃんには桃果ちゃんなわけで……、でも桃果ちゃんのおかげで気持ち軽くなった。

冷静に考えると桃矢の立場は低くない。余裕じゃん！

そこまで考えが及ぶと、俄然、桃矢の中に怒りが込み上げてきた。

「僕は国王を引き受けるなんて言ってないよ！　第一、僕の親が黙ってない！　今頃警察沙汰になってるよ。へたすりゃ国際問題だ！」
大声を出す桃矢。対して、らしくない顔をするミウラ。彼女に対するスマートなイメージがどんどん崩れていく。……これ見よがしな桃果の舌打ちは、聞かないフリをする。

「ご両親からは許可をいただいていますか？　当然、理由はご存じでしたし」

「あれ？」

ちよつと、……こつ……期待していた答えと違う。

「僕に電話貸してー！」

母から帰ってきた答えはこうだ。

『あれ、言つてなかったっけ？ でも、ミウラさんっていい人ですよ？ かわいいし』

「父さんに代わって！」

『父さんだ。思ったより早かったけど、まあいい。男はいつか旅立つものと相場は決まっている。盆と正月には帰ってこいよ』

桃矢は電話を静かに置いた。世にも情けない顔をして振り返る。

「もちろん日本政府にも、外交的に話がついています」

ミウラがとどめを刺した。

もつだめだ！ 膝を抱えて、床にうずくまる桃矢。

「可哀想に」

優しく桃矢の頭を撫でる桃果。目にいっぱい涙を浮かべて桃果を見上げる桃矢。

……桃果は嬉しそうに笑っていた。

「トーヤ様、どうかご安心を。トーヤ様が思っておられるような責務を我らは求めておりません」

初めて柔らかい笑みを浮かべるミウラ。

「は？ はあ？」

「ええーっ！」

腑抜けた声を出す桃矢と、あからさまに残念そうな声を上げる桃果。

「いわば素人のトーヤ様に、今までの生活を捨てて王になれと申し上げるのも、それは無理な話。我らとて重々承知しております。これはあくまで形式的なものです」

まずは桃矢を安心させるため、結果を先に言うミウラ。

「ゼクトールは今、問題を抱え込んでおります。といっても、トーヤ様がお気にかけられる類の問題ではありません。政治形態に王制を採るゼクトールといたしましては、政府首脳部が案件を解決するにあたり、仮初めとはいえ国王が必要なのです」

ミウラは、一息ついて桃矢達の様子を見た。ツバメの雛のように口を開けている桃矢と桃果。上々な結果である。

「トーヤ様におかれましては、ゼクトール政府の機能回復のため、いくつかの案件の承認と権限委譲に同意していただだけで結構です。それもたった二日間。ご迷惑はおかけいたしません。合間に、郷土料理や名所観光などでお楽しみいただければよろしいかと」
固い笑みをぎこちなく浮かべるミウラ。

「いわば、機内移動時間無視のゼクトール国王体験一泊二日の旅をご満喫！ って解釈で良いのかしら？」

ミウラの説明に納得いつたのか、桃果が合いの手を入れる。

「はい、正にその通りでございます！」

今度こそ、心底につこりと微笑むミウラ。年相応の笑顔。とても可愛かった。

しかし。

「冗談じゃない！ そんな一方的で理不尽なナニに付き合うほど僕は暇じゃなキユ！」

「キユ？」

細い眉を寄せるミウラ。

そこには、後ろから桃矢の首に腕を絡ませた桃果がいた。

立ったままのネックブリーカー。容赦ない事で有名な技だ。

「で、ゼクトールって何処にあるの？ 教えてちょうだい」

桃矢のことはさておき、気さくに話しかける桃果。

ミウラは桃矢と桃果の眼前で紙を広げた。それは世界地図だった。落ち込んでいても始まらない。桃矢は、逃げ出すための情報収集のつもりで覗き込む。

「ここです」

ミウラが指し示す場所は、赤道からちよつとだけ離れた海。の真ん中にある、針で突いた傷のような小さい島。

「えっ！ ええーっ！ 島国？」

頭を抱えたのは桃矢。ありとあらゆる大陸や半島や島から離れるだけ離れている。まさに絶海の孤島。陸、海、空路での単独脱出は不可能。

「拡大図はこう」

ミウラがもう一枚の地図を広げる。

ほぼ円形の島から西に一本、岬が張り出している。一言で表現するならフライパン。

それと柄の延長線上に小さな島が一つ。

「こつ、これは……屋久島より小さい？」

桃果も会話に窮し、眉をひそめていた。

「でもさ、なんでこんなへんぴな……もとい。ちいさな国の姫様を旧日本軍が？」

桃矢、当然の疑問である。

「真の目的は計りかねますが、我が国で戦局に係わる何かを発見したらしく あっ！ 見えてきました。あれがゼクトールです！」

ミウラが、顔を輝かせながら窓の外を指さす。桃矢は、指された景色を見るついでにミウラの表情を盗み見た。故郷を見るミウラ。子供ばい顔をしている。

「うわっ、ちよーすごっ！ ヤバイくらい綺麗！」

桃果の歓声に、桃矢ものぞき込む。

コバルトブルーの中にエメラルドをちりばめた海。そこに浮かぶ緑の島。

陽の中の陽、光の景色が広がっている。

「美しい！」

あまりにも現実離れた美しい景色がどこまでも続いていた。

結局、ゼクトール本国に降り立ったのは、拉致られてから一日以上経ってからだった。

3・コバルトの海（後書き）

お気に召しましたら、軽く評価ボタンを押してください。
軽く。

4・水着

底抜けに青い空。暖かいを通り越した、あきらかに熱帯性の気候。やんわりとした風に漂ってくるのは潮の匂い。

暑い。いや熱い。

ガラガラという擬音でしか表現できない、強力かつ容赦ない太陽光が恨めしい。緩やかな風が吹いてなかったら、とても立ってなどいられない。

空港は立派だった。

旧日本軍が作ったという、大型旅客機も発着可能な滑走路が一本。一本だけ伸びていた。

随分金がかかっているらしく、夜間発着も可能とのこと。

後は小屋が一棟と、てっぺんに吹き流しを一本揚げた管制塔がそびえ立っているだけ。

移動時間と時差の加減もあるのか、ここゼクトールは、朝の早い時間帯だった。

「ビバ、南海の孤島」

桃矢の歓声は生ぬるかった。ご陽気な単語に反比例して、勢いがない。

一日程度の再会なのに、久しぶり感の地面。よく日に焼けたコンクリートの感触を通学靴の底に感じながら、桃矢は大地を踏みしめた。

目の前に広がるこの光景。桃矢は似たような光景を何度かテレビで見た記憶がある。

外国から要人を迎えるときの、あの光景。あの式典。あの式典。出迎えの音楽隊が、ゼクトール国歌らしき、のんびりした調べを演奏している。

「常夏のー、国、ゼクトールー。南海いにいー、浮かぶ島あー」桃果が即興で詩を乗つける。四拍子で構成された実に平和な国歌だ。とても桃果が主張するような戦闘国家には見えない。

が、なにか違和感を感じる。

「なに？ やっぱ暑いから？」

楽団員は、全員女の子。中学生くらいか？ まあ、それはそれでアリだろう。

問題としているのは服装だ。上半身は白いセーラー服。まあ、これはこれでアリだろう。

解せないのは下半身。スカートもズボンもはいてない。

全員ハイレグの白い水着。……と、白のブーツ。

この地方の風習なのかもしれない。なにせ暑いからね……周りは海だし。

桃矢は結論づけた。これは南国ゼクトールの風習だ！

ハワイの空港で出迎えてくれるお姉ちゃんは上半身ビキニの水着じゃないか。なら下半身水着の国だってあるはず。ワンピースの水着ってのが健康的じゃないか！ いやあ、ゼクトールってさすが南国だなあ！

……なわきやねえだろ！

桃果はどう受け取ったのだろうか？ 後ろを歩いているはずの桃果を振り向く。

目が……、桃果の目がわずかに細められていた。細めた猫の目に似た形。

だめだ！完全にゼクトールを気に入っている。

これは……桃果を置いて、一人脱出という選択肢も。……あるいは。

そんな風に考えていたら、桃果が手を握ってきた。

色っぽい握り方ではない。あえて言うなら手錠的な握り方。

桃果の顔を覗き込んだ。逃げたらコロスと彼女の目が言ってる。

「ゼクトール王宮へ向かいます。この国の重鎮達が、首を長くしてトーヤ様をお待ちいたしております」

よぼよぼの爺様が運転する、オールドファッションのリンカーンに押し込まれる桃矢達。

沿道には大勢の人が繰り出していた。手に手にゼクトール国旗と日の丸が握られ、ハゲシク振られている。熱烈な歓迎である。

桃果は嬉しそうに手を振り返っていた。

「ほら、桃矢。ボサツとしてないで手を振ってあげなさい！」
気乗りしない表情で手を振る桃矢。ポーとしていた桃矢だが、ふと気付いた。

道々で旗を振る人々。日本の夏とそう変わりない服装。桃矢と同世代の女の子が、黄色い歓声を上げている。一人や二人ではない。三桁に上る数だ。

桃矢の集中力が、ピーキーかつクイックレスポンスで上昇した。あらためてよく観察すると、グラマラスな大人のお姉さんも多数混じっておられた。

旗を振るたび、揺れるバスト。ワンアクションごと、くねるヒップ。柔らかそうな太股。

……いや、健康的な意味で。

水着を着ている女の子はいないが、みな薄着である。暑いから当然だ。

俄然、男前の顔をする桃矢。手の振りも、きびきびとしたものに変わる。

……いや、健康的な意味で。

視線を感じて振り返ると、桃果のニヤニヤ笑いがあった。

これはまずい！ このままでは、しめしがつかない。

「いや、ほら、別に国王になることを認めた訳じゃないからね。だってこんなに歓迎されて、いい加減な態度できないでしょ？ いや、健康的な意味で！」

たまらず桃果が嘔きだした。桃矢の沽券が回復するのは、遠い未来のようだ。

一分二十五秒のドライブが終わり、運転手がプルプルした手でドアを開ける。

降り立った先に構えているのは白亜の。

「ここがゼクトール王宮です」

「まあ、予想は付いていたんだよな」

ミウラが案内してくれたのは、築五十五年、木造二階建て。

白の剥げかけたペンキを基調とした外観に、いろいろと飾り的な装飾が施されている。

田舎の村役場より、よっぽど金のかかった建物だ。

ありていに言って、桃矢が住んでいた土地の市役所より劣る。

「間を取って町役場だな」

桃矢は、なにもバツキングダム宮殿やノイシュヴァンシュタイン城を想像していたわけではない。が、やや撫で肩姿勢で歩いていた。

「お城ってイメージじゃないわよね？」

桃果も、同じことを言いながらミウラの後について歩いていく。

「狭いながら、王宮には美術館や図書室、卓球場などが入っております。もちろん、各行政機関も全て収納しています」

「卓球場の意味が解りませんが、なるほど立派ですね」

「ありがとうございます。では、ゼクトール政府の重鎮達を紹介いたしますよう！」

王宮玄関先で桃矢達を出迎えたのは、水着姿の九人の女の子達。

「えーと……」

言葉に詰まっているのは桃矢だけではない。桃果も黙り込んでいる。むしろ、声を出せたただけまだましである。さすが男の子。

ゼクトールは混血が進んでいるのだろう。いろんな人種が混じっているようだ。

その中で、黒縁眼鏡をかけた、一番背の高いお姉さんが一歩進み出た。

「わたくしはジェベル・オルブリヒト。日本では総理大臣に当たる宰相を勤めさせていただいております。トーヤ様は戴冠式を済ませておいでではありませんが、事は急を要します。トーヤ様のお立場は、これ以後、事実上の国王であらせられます」

明るいブラウンの髪を後ろに流した大人のお姉さん。透けるように肌が白い女の人。背が高く胸が大きい。くびれたウエストに張りのある腰部。目の置き場にやたら困る。

「よろしくお願いいたします、トーヤ様」

「あ、よろしく願いました」

後頭部をガリガリ搔く桃矢。アガっているのは火を見るより明らか。

しかし、一国の首相にしては若すぎないか？ 若作りをしているようには見えないが。

「失礼ですが、ジェベルさんはおいくつですか？」

堂々と女性に年を聞く桃矢。

「二十四才です」

にこやかに答えるジェベル。やはり若い。若すぎる。

これを機にしてゼクトール政府重鎮達の自己紹介が始まった。

「国土交通委員長のエレカ・フリフラ！ 今年で十八っス……です」

ショートの黒髪と漆黒の瞳が白い肌に映える。

つぎの子は、無言で頭を下げただけだった。青白い髪がゆらりと揺れる。

「あ、この子は文部科学委員長のミラ・ロコモコ。十七才。ほんと無口で困るよね」

ミラの頭を平手ではたくエレカ。はたかれているのに、まったく無関心顔のミラだった。

「農務委員長を拝命しました、ノア・モフモフ、十三才です」
長く垂らした三つ編みが可愛い。身長も胸も小さいながら引き締まった体つき。

「ががが、外務委員長のサラ・プワプワ、十三才です。よよよ、よろしく願います」

おかつぱ頭で、接触感覚が柔らかかそうなイメージの幼児体型。

以後、十八歳の商務委員長ジムル。十六歳の財務委員長マープル。十五歳の法務委員長アムル、と続いていく。

ニコニコしている桃矢だが、実のところ、内心、ものすごい疑念が渦巻いている。

居並ぶ委員長達の共通点を桃矢は発見したのだ。多分、桃果も気付いているだろう。しかしこれほど聞きにくいものはない。

「そして最後に、国防委員長を務めさせていただきます、ミウラ・ヴァイツ。十七才です」

ミウラの挨拶がとどめとなった。桃矢は、たまらず疑問を口にした。

「ゼクトールの閣僚には、年齢や性別に制限があるのですか？」

九人の委員長達、すべてが女子。宰相のジェベルが最年長。でも二十四才。

OLが一人。高校生が五人。中学生が三人。平均年齢、十六・八才。

つーか、日本の法律では、ジェベル以外全員未成年。

彼女たちが自分に仕えてくれる。嬉しい！ でも不安！

低い次元の狭間で揺れる桃矢であった。

4・水着（後書き）

次回、5・最終防衛ライン。

なにか最終防衛ラインなのかw

誤字脱字の指摘・感想お待ちしております。

僕力ノの感想もお待ちしてまゝです！

5・最終防衛ライン

「疑問はごもつとも」

艶然と笑うジエベル。意味無くデヘへ笑いを返す桃矢。桃果に足を踏まれた。

「ゼクトールは、主立った産業のない小さな島国です。小島嶼開発途上国として、国連に認定されています。政府財源は、国民の出稼ぎによる送金に頼っている次第です」

「だから、なんで若い子ばかりが……あ！」

あることに気がついた桃矢。そういえば、沿道で迎えてくれた国民の皆様方。全て女性ではなかったか？

「まさか？」

仮説が確信に変わる瞬間。

「まさか成人男子全員が、海外へ出稼ぎに出ている……とか？」

いいところを奪い去ったのは桃果。彼女の顔に張り付いた笑みが、紙のように薄っぺらい。

「その通りです。我がゼクトールでは、一家を支えるのは男の仕事。そしてゼクトールには主立った輸出産業がありません。ゆえに労働可能な男子全員、家族を残して諸外国へ出稼ぎに出向いています。ゼクトール人は実直勤勉、そして忠実な国民性で有名なので、引く手あまた。最近には主に中東方面での雇用が増えています」

ジエベルは肯定した。

他の委員長達も頷いている。彼女たちの父や兄は、遠い異国で身を粉にして働いているのだ。そして、年老いた祖母のため、ある者は妻や子供達のために、またあるものは母や妹たちに、稼ぎのほ

とんどを送っているという。

「立派ね！ あたしの両親なんか、恥ずかしくて語れないわね。家族のために歯を食いしばる。美しいわ！」

自分の世界に入り込む桃果。遠い一点を見つめている。

「まあ……、ここよりは美味しものや面白いものがあるので、それほど歯は食いしばっていないようですが」

「美しいわ！」

現実から目をそらし、オリジナルストーリーを完成させる桃果であつた。

「そしてもう一つ。ゼクトールの政治的慣習が関係します」

ジェベルの次の言葉を目で促す桃矢。

「ゼクトールの政治体系は、絶対君主制。王の権限は絶大です。よつて、ゼクトールにおける閣僚とは、王の指示の元、各部門での実行機関にすぎません。つまり委員会。そして、国王が亡くなった場合、政治家と呼ばれる者達は、一斉に引退します」

大昔、日本や中国では、大王が死ぬと側近の者や使用人が殉職させられる。そんな話を思い出した桃矢。あれは大昔の風習。

ジェベルは言葉を句切つたまま、桃矢と桃果を交互に見ている。

二人の理解度を測っているようだ。

二人ともここまで付いてきていると判断したのだろう。ジェベルは、話を続けた。

「貴族と名乗るのはおこがましいですが、私たちは家ごとに各委員会を受け持っています。そして代々、長の地位を受け継いでいるのです。たとえば、我がオルブリヒト家が全委員会をまとめる、いわば委員会会長の家柄。そしてミウラのヴァイツ家が戦人の長、マーブルのミートン家が王家の倉を預かる家柄」

桃矢は、再び日本の歴史をひもといていた。大和朝廷の時代、家々によつて、ある程度担当する役職が決められていたような？

いつものように桃果に視線を向ける桃矢。くりつとした可愛い目を見開いてジエベルの説明を聞き入っていた。桃果も驚いているようだった。

違う！ 彼女は、初めて聞くシステムとして驚いているのだ！

桃矢は、桃果は歴史がからきし駄目だったのを思い出した。

「国民総所得の低いゼクトールでは働き出す年齢が低いため、法律では十三才で成年と見なされます。ついでに言いますと、わたくしの祖々母は、十四才で宰相に就任したという経歴の持ち主です」「ま、まあ、国の事情だよな」

一つの謎は解けた。のこるはもう一つの謎。

後で聞きにくいこと。いまなら勢いで聞ける気がする。

「その辺は理解できましたが、……みなさん水着なのは何故？」

漆黒の水着を着ているジエベル。あきらかにサイズが一つ小さい砲弾型に突き出したバストと相まって、勝手に視線が首下に移動するという男の性さがに、さつきから桃矢は苦しんでいるのだ。

それだけならまだしも、タイトミニスーツを着込んだミウラ以外、同年代の女の子が下半身水着姿である。何人かはハイレグだ。おまけにゼクトール女性は、美人ぞろいでナイスバディ！

間違いを起こしそうでとても怖い。それ以前に桃果の仕置きが怖い。

不可侵の領域へ足を踏み込んだ感の桃矢。いろんな意味で緊張している。

「桃矢、鼻と唇の間が長くなってるわよ」

桃矢が鼻に手を当てる。それを見て、またもや笑いを堪える桃果。

「これはゼクトールの風習です」

ジェベルの答えは簡潔だった。

「元々は宗教上の理由からですが、王が変わると、みな一斉に衣を替えるのです。制服のデザイン選択は、新しい王にまかされます。つまり王の好みでいろんなタイプの制服が生まれるのです。トーヤ様の代に変わった今、制服もトーヤ様の趣向に合わせて替えるのが習わしです」

「え！　じゃ、その水着は先王の趣味？」

にこにこ笑いながら頷くジェベルの水着が黒光りしていて眩しい。「先々代は、上がセーラーで下がマイクロミニという制服を採用されていたそうです」

遠き過去に、勇者を見る桃矢。

「さて、トーヤ様におかれましては、どのようなデザインがお好みでしょうか？　全員の分を揃えるには時間がかかります。お話ついでに、今ここで伺いしたいのですが……」

ジェベルの言葉に、桃矢は唾を飲み込んだ。

「ど、どのようなモノでも？」

これはアレだ。服という文化を手に入れた代わりに失った物を。

「王の命令は絶対です。死ぬと言われれば、喜んでこの命、捧げましょっ」

ミウラが直立不動の姿勢で宣誓する。後ろに控える家臣団の女の子達も首肯してる。

「たとえば、……この国、暑いしね。……自分の好みというよりは、みんなの快適性を第一に考えてるんだけど……いやあ暑いよね？

熱帯だし。……そこで提案なんだけど……」

「なんなりとご用命下さい！」

真剣に受けるミウラ。きりりとした眉がりりしい。

「それじゃ、上半身裸にな」

そこから先は、桃果にネックブリーカーをかけられたので喋ることができなかつた。

「乳房を出すのは恥ずかしい事ですが、王の命令とあれば仕方ありません。制服代が安上がりで済むのが救いです」

平然とした面持ちで肩から水着をずらしたすミウラ。ジエベルやノア達も頬を朱に染めながら、次々と肩を出しはじめた。

「ストップ！ ストップです！ 命令です、王の訂正命令！ 今のはナシ！」

ネックブリーカーを解かれた桃矢。解かれた意を解し、必死で訂正の弁を振るう。

「今のままで変更無し！ 僕と先代国王は趣味が一緒みたいですうっ！」

泣きながら、しかし、ギリギリのラインだけは守り通した桃矢であつた。

5・最終防衛ライン（後書き）

次回、6話・記念写真

かみんぐすうーん！

明日、昼に上げられそうだ。

6・記念写真

「このままでよろしいのですか？ トーヤ様！」

大きな声が閣僚の中から上がった。フリル付きの赤い水着が可愛い十六才の財務委員長、マープルである。

「ありがとうございます！ トーヤ様。財務を預かる者として心よりお礼申し上げます！」

両手を祈りの形に組み、目から涙を溢れさせるマープル。何度も頭を垂れる。

「え、泣くこと？ そんなに今の水着が気に入っ」

桃矢の足を桃果が強く踏んだ。

「財務委員長が感謝することと言えばお金の話ですよ？」

桃果が肩で桃矢を押しつけて前に出た。笑顔のまま、しかし眉がつり上がっている。何かに気がついたようだ。

「制服を一時に何百着も替えるには、まとまった金額が必要よね？」
「あ、そうか！」

そこまで言われて桃矢も気付いた。桃果の後ろで。

気付くのが遅かった。気の付かない男と思われるかもしれないと軽い後悔が立つ。

それにしても、桃果は異様に頭の回転が速い。……桃矢の頭を押さえるため限定だが。

「桃矢は……いえ、桃矢様は、無駄に財政を支出すると言われていたのです」

「トーヤ様！」

花が咲いたような笑顔を浮かべるマープル。

そして口々に謝意を唱える女の子達……もとい、各閣僚。桃矢、モテモテである。

桃果の機転が桃矢の面目を立たせた。感謝！ した瞬間を計ったかのように、ちらりと

振り返る桃果。目が……イタチ目をした瞳に「貸し」の二文字が浮かんでいた。

引き替えに、桃矢は女の子……もとい、全閣僚の信任を得たと考えればいいはずだが、それにしても借り入れた金額が大きすぎる気がする。

「ではみなさん、せめて胸の谷間だけでもお出ししましょうか？」
ジエベルは胸に手を掛けたままだ。真剣な顔をして同僚達に相談を持ちかけた。

「谷間かー、……ジエベルさんに比べられると、ちょっと辛いんだよなー！」

国土交通委員長のエレカが早速行動に出た。ボーイッシュな彼女。蒼い競泳水着の胸元に手を乱暴に差し込んで、ごそごそしている。何をつかんでいるのだろうか？

「……………」
無言でペールブルーの水着をはだけていくミラ。マーブルの言葉を額面通り受け取ったのだろう。薄水色の目が虚ろなのは動揺のせいかな、それとも元々の性格によるのか？

「トーヤ様の命とあらばこのミウラ、軍人として一命をも投げ打ちましょうー！」

顔を朱に染め、勢いよく胸元をはだけるミウラ。彼女は、十七才

とは思えない質量感の持ち主だった。

あつという間に中高一貫校の女子更衣室と化した国王執務室。
どこの神様かわかりませんがありがとうございます。桃矢は神の
奇跡に感謝し、一生ついていくことを誓った。

「いえ、それほどでも」

「え？」

桃矢の思考を読んだとしかいえないタイミングの相づち。いった
い誰が……。

「待ちなさいっ！」

大声を張り上げたのは桃果。神の威光を地べたに引きずり下ろす
悪魔の咆吼！

顔を赤らめた者、自慢顔やどこ吹く風の者、全てが脱衣を中断。
桃果に視線を向けた。

「国王がいつ、ぱいぱいを放り出せと言いましたか？」

怖いくらいに平常で冷徹な声を出す桃果。

「ふんっ！ トーヤ様のお付きだかなんだか知らねえが、桃果様？
あんた、胸の谷間もねえ小娘なのかい？」

可愛い谷間を放り出したまま、詰め寄るエレカ。腕を前に組んで
寄せ、強調している。

「ふっ！ よくいるのよね。胸を放り出すだけが色気と勘違いして
る小娘って」

両手の平を上に向け、ヤレヤレのポーズを作る桃果。

「んだとおー！」

袖まくりのポーズで詰め寄ろうとしたエレカ。それを押しとどめ
るミウラ。

桃果はエレカを挑発するように、芝居つけたっぷりに話し始めた。「あらあら、見せた後はどうするの？ それ以上、なにを見せるの？」

「何って……そ、そそそ、それをここで言わせるのか？」

額に汗を浮かべるエレカ。言葉に詰まる。

言ってくれ、その単語を！ 神よ、魔神に負けるな！ 神に祈る桃矢であった。

「お下品ね。おほほほほ！」

桃果は芝居気たっぷりに笑いながらクルクルと回転。ビシリと人差し指をエレカに突きつけて回転を止めた。

「見せてしまえばお終い。見せずに魅せる、という意味が解る？」

桃矢陛下は脱げとはおっしゃってない。その意味、わかるわよね？ 男と女の高等な遊びよ。まさか、エレカ委員長ほどの女性が、桃矢国王陛下をそこら辺の男と同列に扱ってないわよね？」

出来の悪い生徒に教える女教師よろしく、人差し指を立て、ゆっくりと左右に振る桃果。

「な、なるほど！ わたしは恐れ多くもトーヤ様を見くびっていたことに……くっ！」

エレカは力なく床に膝をつき、うなだれる。見かけや態度に似合わない素直な性格だった。

一方、桃矢も神の無力さに絶望し、背中を丸めてうなだれていた。

「ハイハイ、みんな元通り水着をなおして！ 規律の乱れは服装から。注意しましょう！」

着衣を乱す音と直す音。同じ衣擦れの音であるのに、あまりに大きな違い。自分の思考力が回復していく様に無情を感じる桃矢。ま

た一步大人になった気がした。

そして、大人になった桃矢は開き直っていた。

「もう一つ疑問があるんですが」

ものはついで。聞くは一時の恥聞かぬは一生の恥という諺が、桃矢の頭の中をぐるぐると舞っている。

「これも最初から思ってたんですが、みなさん、なんで日本語を流暢に話せるんですか？」

「そういえばそうね。いままで気にもかけなかったけど」

剛気な桃果はさておき、ここまでの会話、全て日本語である。

「トーヤ様が次期国王と承認された時、ゼクトールの第二公用語を日本語に制定したのです。それからの我らは、一日二十四時間を二十五時間の猛勉強をして日本語をマスター致しました」
皆、一様に胸を反る。ジエベルはもとより全委員長が胸を突き出す。九対十八房の誇り。

壮観である。

神はまだ、桃果に滅ぼされたわけではなかった。桃矢は神の無事に安堵した。

「わたくしは無事です。どうかご安心を」

今、桃矢は確かに神の声を聞いた。

「ではこれより、新政権誕生による記念写真を撮りまーす！ その後はみんなそろって朝食ですよー！ はい並んで並んで！」

ジエベルの号令の元、呆然とする桃矢を中心として、わらわらと集合する委員長達。

ちやっかりと桃矢の隣に位置し、爆笑中の桃花を筆頭に、みんな笑顔で写真に収まったのだった。

6・記念写真(後書き)

次回、「王座」

王の権限とは？

王の栄光とは？

∴「玉座」になるかもしれない。

7・王座

「えーと……」

桃矢が狼狽えていた。

映画やテレビでよく見る、南国情緒たっぷりのシーン。

天井で、厳かに回転する巨大なプロペラ。白いテーブルクロスが眩しい長テーブル。色とりどりの花や溢れんばかりの南国フルーツを盛った美しい器。

長テーブルの両脇に少女達……もとい、何らかの閣僚達が、何らかの順に、並んで座っている。

一人ずつ、スク水にエプロン姿の愛らしい少女が……もとい、給仕がついていた。

面食らった感の桃矢であるが、国王なんだから当然上座。不満そうにしている桃果が次の座。

「ジエベルさん、これって朝ごはんですよね？」

ナイフとフォークを持った桃矢。これから朝食メニューを平らげようというのだ。

「はい、なにか不手際でもございましたでしょうか？」

「いや、その、量がね……」

顔を見合わず桃矢と桃果。そう、量が問題だった。

鉄板の上で、音を立てて蒸気をあげる、広辞苑のような六百グラムステーキ。の、上に置かれた目玉焼き五個。の、上からかけられた濃厚なデミグラスソース・マッシュルーム入り。キラキラとしたラードが自己主張している。

桃矢は線が細いくせに燃費が悪い方だ。でも、朝からこれはいくらなんでも無理だろう。

「こんなのがゼクトール王の食事なんですか？」
げっそりとした桃矢がジエベルにたずねる。

突然、大きな音がしてドアが開いた。驚いてドアの方を見る桃矢護衛兵の女の子達（競泳水着姿）が泣きそうになってしがみつくの歯牙にもかけず、突進してくる巨大な肉塊が二つ。

「こんなので申し訳ございませんっ！ トーヤ様あつ！」

一人はガラガラ声の老人だった。二メートルをかるく超える巨漢。ちりぢりの黒髪を肩まで垂らしている。顎髭が濃くて長い。ひよこのアツプリケがついた白いエプロンをつけていた。

「本来、八百グラムステーキに卵十個の所、たった五個で調理してしまいました！」

テンガロンハットを被ったもう一人の老人が、膝をついた。二メートルにわずか足りない長身。金髪でボブカット。立派な髭を鼻の下に蓄えている。こちらの老人はピンクに白いフリル付きのエプロン姿だ。

抱きついて爺ちゃんの突進を止めている水着姿の少女、……もとい、衛兵達を、小さな子供を扱うかのように、二老人は軽々と抱き上げて下ろした。実際、衛兵は子供だったが。

二人とも筋肉が異様に発達している。そして見上げるような大男。

「ブロスにハセン。二名ともそこへなおれ。トーヤ様に代わり成敗してくれる」

ミウラが、ワンアクションで拳銃を引き抜く。フルオートが握られていた。

桃矢はもとより桃果まで、突然の出来事に棒立ちだった。

「処罰は覚悟の上！ 我ら王室の調理を預かって十余年。前王に請われるまま、当初から予算オーバーを繰り返して参りました。すでに王室維持費が尽きましてございます！」

「ごつい両手を祈りの形に組んで、頭を下げるキングゴングのような黒髪の巨人。」

「どうか、どうかトーヤ様におかれましては、毎朝のステーキを半分の四百グラムに！」

「テングロンハットの巨大コックが額を床にこすりつける。半分でも厳しい！ 正反対の意味で。」

と、ここで桃矢の額、星形のホクロに嫌な色の光が走った。

「いやいやいや、ちょっと待って！ 朝がステーキなら、昼ゴハンはどうなるの？」

ある意味、興味が湧いた桃矢。怖い物見たさである。

「本日は一皿料理です……。トリュフのスライスで覆いつくしたフォアグラのブロック入りチーズとバターの濃厚クリーム肉厚ベーコンカルボナーラ太パスタを大皿で！」

桃矢の胃が防御反応をした。まだ食べてないのに、胃に膜が張った感じがしたのだ。

「ちなみに、今夜のメニューは、ヘルシーな鶏肉をラード油で揚げた」

「夜はいいわ！ 聞くだけで胸焼けしてきたから！」

両手を振ってメニュー解説を制止する桃果。彼女も王室の食生活に厳しさを感じたようで、眉間に皺を寄せている。

「ひよつとして、前国王がお亡くなりになった原因って、糖尿ですか？」

桃矢が小声で、銃を構えるミウラに聞いた。

「それも原因の一つですが、……その他に高血圧と肝硬変と腎臓結石と心臓動脈梗塞と大静脈瘤と脳梗塞を併発されて……。我がゼクトールの田舎医学ではどうしようもなく……」

「いやいやいや、医療先進国でもそれは助からないよ。つーか、誰も食生活を改善させなかったの？」

血が滲むほど唇を噛みしめるミウラ。ジェベルはじめ各閣僚もうつむいている。

「それは……許されないことです」

やはり口を開いたのはミウラ。

「王の命令は絶対です！ まして王家の伝統ある風習。我ら臣民に、口出しなどできません。我らの生与奪権は王にあり！」

口を真一文字に結ぶミウラ。目に危ない光が灯る。

「部下の責任はわたしの責任。ここはわたくしが！」

いっなり自らのこめかみに拳銃を向けるミウラ。閣僚達は誰も止めようとしなない。

そして、銃が火を噴いた。

「危ないって！」

間一髪。桃矢がミウラの腕に飛びついていた。おかげで、狙いはずれた銃弾が壁にめり込むだけですんだ。桃矢の口元が引きつっている。

「我らの忠誠は犬のごとし！ 王の言葉は、神のご意志なり！」
その場に居合わせた者で、桃矢と桃果を除くもの全てが声を揃えた。国の標語なのだろう。それにしてもヤバイ連中だ。

桃矢は、どうしていいかわからなくなって、視線を桃果に向けた。助けを求めるかのように桃矢を見ている桃果がいた。

「恐るべき忠誠心ね！」

桃果の漏らした言葉。桃矢は、ハタと気づいた。そして、こう提案した。

「その伝統料理を出すのは、国の記念日だけにしませんか？ 例えば、建国記念日だとか誕生日だとか」

「ゼクトール王である桃矢様による、記念すべき初めてのまともなご命令よ！」

桃矢の提案を勘のいい桃果が補足する。

桃果が勝手に抜き払った伝家の魔剣、いや、宝刀・国王命令。

ミウラ達は、魔法の呪文にひれ伏した。

虎の威を借る狐。桃矢はすぐにその故事を思い出した。が、口にしないほうがいいという知恵が備わっていたのは幸いであった。

「材料の運搬費だけでお金がかかりそうだもんね。それに、その方が王家の伝統らしくっていいよ。もったいぶる方が、格式も上がるってもんだ」

二人の提案に、ゼクトール人達が驚いている。一様に口をOの字にして固まっていた。

言い過ぎてしまったかと思い、またまた視線を桃果にあわせる桃矢。桃果は、堂々としていると、目で答えてきた。

案の定。

「やはり、トーヤ様は王の器！」

「ゼクトールの国庫、ならびに国民の生活をこれほどまでに心配していただけとは！」

閣僚達は勝手に勘違いしてくれた。

とても単純で、すぐに人を信じる正直者。おまけに良い方へ良い方へと考えるポジティブ指向。

食費だけでこの感謝。桃矢は大げさすぎると思ったが、先程の標語を思い出し、ゼクトールではこんなものなのだろうと一人で合点していた。

なににせよ、ステーキ一枚で……。

「あ、そうだ！」

桃矢の頭上で豆電球が輝いた。

「このギザサイズステーキなんだけど、残すのももったいないからみんなで食べようよ。僕が切り分けるから、みんな、お皿を持ってきて」

ナイフとフォークを手にした桃矢。言ったそばから早速切り分けている。

「トーヤ様っ！」

ミウラが叫んだ。

「え？ はい、すみません！」

とりあえず謝る桃矢。なぜ怒られたのか、理由がわからない。

「我らのような下々の者に、ご自身の糧を自らお与え下さるとは！」
びしりと敬礼しているミウラ。直立不動で涙を堪えている各委員
長達。

長テールは感動の嵐に包まれていた。桃矢は口を開けっぱなしにしている。

しかし、人に感謝されるのは気持ちのいいもの。それにちよつと自慢。桃矢は頬に熱い血が通うのを感じながら、桃果に目を向けた。桃果も桃矢を見ていた。笑って桃矢を見ていた。桃果とっておきの営業スマイルだった。

桃果がこの笑みを浮かべるとき。それは打算ずくの時。何かある。そこまで考えが及び、桃果の真意に気付いた。桃矢の脳裏に、ある入り口に立っているイメージが浮かぶ。

王座への入り口。

既成事実として、桃矢は自分をゼクトールの王と認める発言をしてしまっていた。

自らの手で、よりいっそう後戻りしにくくしてしまった！

桃矢は、自分の顔色が変わっていくのを実感した。それは、桃果が腹を抱えて笑っている事からも、うかがえるのだった。

7・王座（後書き）

玉座…王座…うーん…。

次回、8・神よ！

物語は一気に宗教問題へ（嘘）！
仮眠具すーん！

8・神よ！

「ゼクトールは今、様々な問題を抱えております。それら諸問題を解決するためにも、この国には王が必要なのです」

残っているのは、今喋っているジェベルと、後ろで控えるミウラだけだった。

ステーキ問題の後、各閣僚は、おのが仕事へと散っていった。

授業が始まったのでいそそと教室へ向かう女子校生を連想させるその様は、ゼクトールの将来をそこはかとなく不安にさせるものだった。

桃矢にだつてわかる。常識的な問題。急な政変である。通常の仕事以上に緊急の仕事が降つて湧いたのだ。そして、国を運営する新しいスタッフは、慣れない上に経験も浅い。おまけに若すぎる。一分一秒が惜しいはずだ。

新しい国王に、国民はお祭り騒ぎで歓迎していた。めでたいことだ。政府もそれを奨励している。

桃矢はちよつぴり心苦しかった。一泊二日の王では、国民を騙すようなものだからだ。

「国民は、トーヤ様を新国王としてお迎え致しましたことを心の底よりお喜び申し上げます。これは紛れもない真実です。しかしまた、国民は、王家に対して神聖な格式を求めるものでございませぬ」

ジェベルは、眼鏡の位置を指で直した。

「なんか、授業受けてるみたいね」

桃果の感想は桃矢の感想でもある。

年齢と風貌からいって、新任の女教師で通りそうなジェベル。…
…水着だが。

一方、学生服のままの桃矢と桃果。こちらはまぎれもなく現役学生である。

「即位式、つまり戴冠式を迎えて、初めて王とられるもの。逆に言えば、戴冠式を迎えなければ王として認められない、ということでもあります」

今の所、なんか意味深な感じがする。思わずノートに取りたくなくなってしまった桃矢である。

「時間は貴重です。長旅でお疲れのところ真に申しわけございませんが、トーヤ様におかれましては、これより即位の式を受けていただきます」

ますます、逃げづらくなってしまった。第三者的立場の桃果は、ららんと目を輝かせている。異常なまでの乗り気である。天井を仰ぐ桃矢。

「なんつーか、こう……神に祈りたい心境になってきたんですが」
桃矢が呟く。ミウラとジェベルは計ったように互いの顔を見合わせた。

「それはちょうどよろしゅうございます」
ジェベルが慈母のような笑みを浮かべた。何がちょうど良いのかわからないが、美人が自分に笑顔を向けてくれるのは男として嬉しい。

「王位を授ける役は、ゼクトールの国教であるヌル教の神官長です。これから向かう先ですので、ついでにお祈りなされてはいかがでしょうか？」

桃矢の笑顔が固着する。今まで桃矢の側についていた神が、敵に

回った瞬間であった。

「ジエベル様。トーヤ様からみればヌル教は異教です。トーヤ様に宗旨替えを願うのも無茶なお話ではないでしょうか？」

ミウラが、その微妙な空気をを感じ取った。方向が間違っているが、「それは想定外でした。しかしこれは大問題です！」

桃矢の苦悩をよそに、別問題で考え込む二人の麗しき乙女。自分のことで悩んでくれる美女二人という構図も、それはそれで、それぞれあるものがある。

そういえば、二日間限定だけど、この二人の生与奪権は自分にあるんだっけ。なんて嬉し恥ずかしな妄想が膨れあがってくる桃矢。ますます進退窮まってきた。

ああもうどうしたらよいですか神様？　って、神は敵だったし。

まてまて、僕は何処へ行こうとしているのか？　初心は何処へ行った？　しかし、この立ち位置を捨てたくない。

人、これを堂々巡りと呼ぶ。

悩んでいる桃矢に白い腕が伸び、揺さぶった。

「安心して、二人とも！　自由と生死を縛る強制をしないかぎり、日本人はどんな神様にだって順応できるという属性が、生まれながらにデフォルトされているのよ！」

桃矢の胸ぐらをつかんで引きずり回しながら、桃果は拳を天に突き上げる。脳を揺すられグダグダになっていく桃矢。

「あ、あの、桃果様！　神という存在は魂に直結するもので、そんなに簡単には……それより、トーヤ様をそんなぞんざいに扱っては！」

ハラハラしながら、及び腰で桃果を制止するジエベルとミウラ。

特に、唯一神を信奉する者にとって神とは、その辺の日本人が考えているような生半可な存在ではない。日本人が「神に誓って」と言えばたいいていの場合、嘘偽りを糊塗する代名詞となっているが、彼女らにとつては命を賭して守るための代名詞なのである。

ゼクトール人である彼女達にとって、宗教を変えることなどあり得ない。そして、万が一、信じる神を変えらるということは、人生そのものが変わってしまう事。いや、それ以上の大事件なのである。よつて、桃果の言っていることは、彼女達にとって悪い冗談以外の何物でもない。

「じゃあ……。あたしなら、桃矢を表面上でも宗旨替えさせることができる。どうよ?」

言いながらも桃矢を揺さぶり続ける桃果。桃矢は、自分の脳がプルプル揺れているのを実感した。

「お願いいたします、桃果様!」

桃矢は、飛びそうな意識の中、最敬礼をするミウラとジエベルの姿を見たのだった。

8・神よ！（後書き）

次回、9・異空間感覚

十二な十二、登場の予定。

9・異空間感覚

「午後よりパレードが用意されております。それまでの時間に、済ませるべき儀式を済ませ、各方面の知識を仕入れていただきます」
ジエベルが、にこやかな顔でスケジュール帳をめくっていた。

車に揺られること三分。

制服（水着）に着替えたミウラとジエベル、それに桃果と桃矢の四人は、ゼクトール本島から突き出した岬の入り口に立っていた。フライパンの柄の付け根部分に相当する場所だ。

朝の光の中、白を基調とした南国情緒に溢れる古い建物がぼつぽつと建っている。どこことなく古い遺跡を思わせる地域。

ゼクトールは、珊瑚礁が隆起してできた島。大地の色は白が基本にして特徴。なのに、この辺り、つまり神殿地域だけが「黒い土」で出来た大地だった。

もう一つ。たいした突起物のない地形が特徴のゼクトール島。この位置から西の海を眺めると、丸い水平線の彼方まで一望できる。

「なに？ この反則的な透明度！ 海の底が見える！」

桃果が感嘆の声を上げ、バカみたいに笑っていた。

南国の景色に、実によく似合う笑顔。太陽は緯度の低い地域でこそ底力を発揮する。

明るい太陽と美しい海。

脳震盪を引きずってしまい、胃の中を一度は空にした桃矢だったか、気分は一発で晴れた。

空から見た珊瑚礁もすばらしかったが、間近で見る珊瑚礁の海もまた別格である。

真っ白な砂浜に縁取られた島。エメラルドで埋め尽くした海。半島部分の周囲だけが深い藍色に染まり、色の多様性を楽しませてくれる。

海からの潮風に少し混じったオイル臭が一点の曇りか……。

沖に浮かんでいるのは漁船だろうか？　すぐ側でイルカが三頭、並んでジャンプした。

「ついでですので、簡単なガイドなどがでししょうか？」

ミウラの機嫌が良い。美しい風景が彼女をそうさせるのだろう。きりつとした美少女バスガイドさんの観光案内。桃矢は一発で乗った。

「お願いします」

桃矢を見つめる桃果の白い目に気付いた様子もなく、ミウラが案内を始めた。

「まず、ゼクトール周辺海域の特長ですが、我が国経済水域を囲むかのように、流れの速い海流に取り巻かれております。そのため、動力のない船舶による往来は不可能。これが第二次大戦末期に日本軍と接触するまで、わが国が国際社会より隔離されていた理由の一つです。そして、ゼクトール周辺海域は、季節風や主とした海流から遠く離れています。風らしい風が吹くのは朝と夕方だけ。台風やハリケーンと呼ばれる大型の暴風雨は十年に一度、来るか来ないかです」

たしかに、それなりの高台なのに、風が吹いていない。桃矢の頭頂で、おさまりの悪い一本の毛が、わずかに揺れるだけの微風しか漂っていない。

「ゼクトール島の周囲は、珊瑚礁のため、世界でも例を見ない遠浅です。よって、大型船舶は進入不可能。おまけに、そこかしこにバリアリーフが存在し、上陸用舟艇でも座礁の危険性があります。つまり、本島に着岸できるのは小舟のみ。こういった事象が、国土防衛に一役買っています」

ミウラのガイドは、国防長官のものであった。「はあ」としまりのない口で相づちをうつ桃矢。桃果が、また向こうを向いて肩を振るわせている。

「反面、大型漁船や連絡船なども接岸できない、というデメリットもあります」

ミウラが岬の先っぽを指さした。桃矢と桃果は遠い海域を見ることになる。

ゼクトール島を取り巻くエメラルドの海を割って、深いコバルト色の海が長く西に伸びている。それは海の中の川のように、遠くまで一直線に伸び、外洋の蒼に繋がっていた。

「色の濃い部分は水深が深いのです。何故こうなったかは、今もって解明されていませんが、ゼクトール本島に繋がる唯一の、海の回廊です。ここを抜けないと、棧橋や港に停泊できません。海上防衛はこの地域、一点に絞れます」

あまり興味のない話なので、何とか話題を変える算段はないものと、桃矢はいつものごとく桃果に救いを求めた。

「海軍艦艇は？ もちろん高速艇よね？」

桃果は目を輝かしてミウラの防衛計画に聞き入っていた。……ので、諦めた。

「小型高速艇が三隻。常時この海域に展開されています。型は古いですが、整備回数を多く取っているので常に万全です」
うんうんとうなずく桃果。目が輝いている。

「それから、遠くに見えるあの島影」

遠く、海の道に少しかかるように、小さく黒い島が見える。かろうじて直角三角形をした島影が見て取れた。

「あれはミヨイ島と申しまして、漁業の補給基地になっております。本島から遠く離れた島です。おかげでゼクトールの経済排他的水域が広がっているのですが」

ミウラの長い説明の途中、周囲が急に暗くなった。桃矢はそんな気がした。

桃矢一人がゆっくりと後ろを振り向く。視線を感じたのだった。

9 ・異空間感覚（後書き）

次回、 ・ゼクトール

尖った視線にレッツゴー（死語）！

10・イルマ・ゼクトール

尖った視線だった。それでいて痛くもなければ冷たくもない。懐かしいような、非難されているような、なんとも不思議な感覚。

振り向いた先は、古いゼクトール様式の建物。正面が暗い口を開けていた。

闇の前に女の子が立っていた。年の頃、たぶん十才未満。……たぶん人間。

ゼクトール本来の民族衣装なのだろうか？ 丈の長い原色の布が、そこかしこから垂れ下がった特殊なデザイン。それが異国情緒を醸し出している。

耳の脇を色つきの紐で縛り、前髪を揃えた長い黒髪。その頭頂で、おさまりの悪い毛が一房、揺れていた。

しかしその少女、肌の色が変わっている。青白い。血の気が無いという表現は間違っている。「青白い」という色の肌なのだ。

その子がじつと桃矢を見つめている。特に怖いというわけではない。どちらかと言えば暖かい目。桃矢を呼んでいるような目だった。

大きくなったらすごい美人になるだろうな、などと、邪な事まで考えていた時。

「これはイルマ様。御自らのお出迎え、誠に恐縮至極でございます」横合いから声が湧いて出た。ジェベルが少女に気づいたのだ。

「イルマというのか、あの子は」

もう一度、イルマと呼ばれた少女に向き直る。イルマを含めて、三人の女性がこちらに向かって歩いてきた。三人。さっきまで一人でいたような……。

イルマは、後ろに年上の女官を二人連れていた。後ろに付き従う女官達は、イルマが身につけた民族衣装の簡略型を身につけていた。似たようなスタイルが三人並んでいることになる。

イルマは、桃矢の眼前で歩みを止めた。息づかいまで聞こえる距離だ。入ってはいけない結界を破る緊張に、桃矢の体が震える。

身長差のため、桃矢を見上げる格好のイルマ。

「そのほうがトーヤか？」

イルマの地位がそうさせるのか、慇懃無礼なもの言い様だった。

「え、あ、はい。芦原桃矢です」

またなんか面倒なことに巻き込まれそうな予感がしたので、丁寧に答えておく。

「だんだん、低年齢化していくのね」

桃矢の意図を壊すかのような桃果の一言。

「年を気にするのは年寄りだけなのだ」

その一言に、イルマが噛みついた。噛みつかれたら噛み返すのが桃果である。

すーっと、桃果の手が伸びて、……あっさり結界を破る桃果。

イルマの頭をポンポンと軽くはたいた。殴るでもなく撫でるでもない微妙な力加減。

これに過激に反応すれば子供っぽく見られるだろう。ずるい手だ。

「気安く予に触ってはいけないのだ！」

長い袖を宙に舞わせ、邪険に桃果の手を振りはらうイルマ。子供であることを周囲に印象づける結果となった。

ジェベルが中に割ってはいる。

「紹介が遅れましたね。こちらはイルマ・フタフタ・ゼクトール様。御年九才。ゼクトールの国教であるヌル教の神官長であらせられます。若いながら、歴代神官長の中でも一・二を争うほどの能力をお持ちです」

「よしなにな！」

えらそうに腕を組んでふんぞり返った。握手など求めない。

営業用スマイルを浮かべた桃果が一步前に入る。

「あたしの名は」

「その方の名は聞かずともわかるのだ。騎旗桃果よ」
ズバリ名前を言い当てるイルマ。

「え、なんで桃果ちゃんの名を？」

びつくりする桃矢。その反応に対し、無邪気な笑顔を浮かべるイルマ。

「バカ桃矢！」

一方。桃果は、ものすごく嫌な顔をする。

「前もって連絡が行ってれば、わかることでしょう？ 種のない奇跡なんてあるワケないし！」

肩をすくめる桃果。

「ひねた桃果と違って、トーヤ殿は素直だ。なかなか良き反応をする。気に入ったのだ」

うって変わって、大人びた笑みを浮かべるイルマ。腹に一物を持つ女の笑みだ。

「ずいぶん背伸びしたお子チャマね。てか、強がらないと周りから子供扱いされるのね。幼いのに……不憫ねえ」

イルマを哀れんだ目で見える桃果。桃矢には解っていた。その目は芝居だと。

「な、何を哀れんでおるのだ？ 予は自分を不幸などと思っではおらぬのだ！」

両手をバタバタと上下に激しく振り回すイルマ。ちょっと可愛い。

「ジエベルよ！ この緊急時にシロウトを巻き込んでどうするつもりなのだ？ ケティムは民間人だろうが外国人だろうが関係無しなのだ」

遠慮ない敵意がこもった視線を桃果に向けるイルマ。

「桃矢が即位すれば懸案も落ち着くんでしょ？ それよりケティム共和国がどうかしたの？」

桃果だつて知っている国、ケティム共和国。

地図で見ると、ゼクトールのずっと北にある大きな国だ。

最近、海外からの投資も多く、経済的に伸び盛りの国。新聞にその名が載らない日はない。良くも悪くも、ケティム一国の動向が世界情勢を一変させるだろうと言われている。

人権擁護や自然保護はCクラス。だが、軍事においてはAクラス。核保有国でもある。

そのため日本はもとより、アメリカやロシア、EU諸国から中国、インドまで、刺激を避ける傾向にある。

「ジエベル、ミウラ、その方ら、まだ話をしてないのか？」

ジト目のイルマ。

「申し訳ありません」

受け流すジエベルと、目を合わせられないでいるミウラ。性格の違いが現れた。

ジエベルやミウラの対応からして、このイルマという少女、……神官長と言っていたが、地位は王に劣らぬ程のものらしい。

桃矢は苦手な世界史を思い出していた。宗教上の長、カトリックの教皇の権威は、ヨーロッパの皇帝や王よりも上の存在であること。イルマは王を承認・任命する立場。教皇と同じ立場にある、と桃矢は踏んだ。

それはそれとして。。。

「ジエベルさん、ひょっとしてゼクトールはケティムと揉めてるんじゃない……？」

桃矢は、難しくて嫌な展開を想像していた。

「ケティム共和国ね？ 水上艦隊を多数所有してるわ。確か最近、空母を建造したわねえ。通常型の潜水艦は二桁所有してるし、弾道ミサイルを積める攻撃型原潜も何隻か持つてるはずよ。海兵隊も持つてるし。そうそう、空軍の主力は、スホイ設計部が誇るマルチファイターのSu27。条件によってはステルス機でも落とせるって噂のヤツ」

桃矢の質問を遮る桃果。この辺は彼女の得意分野。スラスラとケティムの軍事情報を解説してみせる。

目を輝かす桃果。キラキラと顔が光っている。桃矢は、桃果の輝きを消したくなかった。だから、このまま話に流される事にした。「む、なかなかやるではないか！」

イルマが桃果を見直した。桃矢は思う。それは早合点だと。

桃果が各国の軍備や兵器に詳しいのは知っている。しかし、興味のある方面だけ。しかも薄く浅く中途半端に。

それが証拠に、陸軍は全くの無知だ。陸軍は汗臭いから嫌い、というちゃんとした理由があるらしい。

「まあよい。めんどくさい話は、後ほどジェベルにでも聞くとよい。とっとと用事を済ませるのだ。トーヤとミウラ、ついでに桃果の三人！ ついてくるがよい」

くるりと向きを変えるイルマ。女官にかしずかれてしずしずと歩いていく。

イルマは、桃矢達がついてくることを当然のようにして、宗教施設の中へ入っていったのだった。

10・イルマ・ゼクトール(後書き)

次回、アンダー・ザ・グラウンド

ゼクトール王国、最深部へレッツゴー！

11・アンダー・ザ・グラウンド

「即位の儀には陽と陰、二つの儀式があるのだ。そこ！ よそ見して遅れるでない。神殿地下はラビリンス。迷子になると生きては出られないのだ」

暗闇の中、イルマの持つランタンの光だけが頼りだった。

外からは想像もできない長くて複雑な回廊を、下へ下へと降りていく。石造りであるう、すり切れた階段を下りた先。桃果の愚痴を聞き飽きた頃、材質不明の巨大な扉の前に出た。

馴染みのない幾何学紋様が、シンメトリカルに描かれた重量感溢れる観音開きの扉だ。

片面だけでも十トンは超えているだろう。

開く仕掛けがどこかにあるはず……。

「ここなのだ」

そういつてイルマは、軽く扉に手をかけた。

「え？」

扉は、音もなく軽やかに内側へ開いた。桃矢を迎え入れるかのように闇が口を開ける。

どうやってあの重さを打ち消したんだろう？ 桃矢は不思議に思った。

桃矢の疑問を置いてきぼりに、無警戒で入っていくイルマ。

「さあ、入るのだ」

「おじゃまします」

つられて足を踏み入れる桃矢。入ったは良いが、見えるのは桃矢の四方、数メートルの床だけ。

細くて長い通路を歩いていく。皮膚感覚や音の反響具合で、そこそこ広い空間らしい事だけは解る。

やがて前方に柱が現れ、通路は行き止まりとなる。

「ちょっと乱暴であるが、……これを見るがよい」

イルマが懐から取り出したのは、不格好な拳銃。

彼女は特に目標も決めず、仰角四十五度で弾を打ち出した。

上空で白色光が爆発する。

照明弾だった。

ここは、巨大な空間。ドーム球場を何個も立体的に積み重ねた広さだ。

「な、なんだ？」

目の前の柱は、空間の中央で天と地を繋ぐ巨大な円柱だった。

正面左に浮かび上がったのは、赤い女神の巨大な座像。

正面右に写ったのは、鎧に覆われた黒い鯨の巨像。

「なによ、これ？」

左後ろに影を落としているのは、鱗に覆われた青い巨木。

右後ろの小さな白い影は、長毛に覆われた四つ足の獣。

桃矢と桃果は、ドーム中央の柱まで伸びた、細長い渡り廊下状の通路に立っていたのだ。

「クシオ様配下に五神あり。

炎の女神にして戦の神、全てを否定する赤のファム・ブレイドウ様。

水の神にして癒しの神、全てを肯定する黒のブレハート・ドノビ様。

木の女神にして生けるものを育てる神、全てに力を与える青のヴイム・マクス様。

鉄の神にして実りと収穫を約束する神、全てに変化をもたらす白のファール・ブレイドウ様。

そして、大地の神にして巨大な船、物言わぬ黄色のタミアーラ様。この五柱がタミアーラと共にゼクトール島へ降臨なされ、いまもどこかで確実に眠っておられるのだ」

胸に手を当て目を閉じて祈るイルマ。神と神にまつわるコトバを口にした神職者は、神聖な何かに祈るもの。

大事な話なのだろう。……聞いている桃矢にとっては、ただの長ゼリフに過ぎないが。

やがて、照明弾は地に落ち、消えてしまった。周囲は前にも増して闇に包まれる。

目で判別できるのは、小さなランタンの光が届く範囲。

テラスの先端。小さな構造物から、ジョイステックのような突起が一つ出ていた。

周囲の巨像から考えて、……無理やり考えて、蛇を模したと思われる。

桃矢の腰あたりの高さから生えている蛇は、四十五度に伸びて、

桃矢の喉元あたりの高さで大きく口を開けている。

明かりに不自由する中、目をこらしてみると、蛇像の口に埋め込まれた、水晶らしき透明な半球体が見て取れた。

イルマの説明が続く。

「陰の儀式は、王位を認めるもの。そして陽の儀式は国民に報告するもの。つまり、陰の儀式こそ、即位式の本分であると言えるのだ」

手にしたランタンを蛇型構造物の脇に置き、振り向くイルマ。逆光になったので、イルマの顔がよく見えない。二人いた女官も、いつの間にかいなくなっていた。

桃矢は、誰かが唾をのむ音を近くで聞いた。いや、自分の喉から聞こえた音だった。

桃矢だけではない。桃果やミウラまでが緊張していた。

「これから行う儀式こそが陰の儀式。要は、これさえ無事に済ませば、事実上、トーヤ殿は王の地位を得たことになる。晴れて陛下なのだ」

くだけた口調のイルマ。軽い空気に、ちょっとだけ気が楽になる桃矢。

イルマが笑った。

イルマは、桃矢達の緊張を考えて、わざと言ってているのか？ だとすれば……桃矢はイルマを子供扱いしない方がいいのかもしれないと思った。

「これより、ヌル教に伝わる王位承認の秘術を執り行うのだ」
イルマは両手の指を広げ天に伸ばし、高らかに宣言した。

「あ、あの、イルマ様。わたしはここにいない方がよろしいのでは？」

ミウラが、おずおずと申し出た。秘術という言葉がミウラに遠慮させたのだ。……興味津々の桃果は、全く遠慮してないが。

「よい。たまには政府関係者が立会っても神罰は下るまい。……それにジエベルはどうも苦手なのだ」

最後はゴニヨゴニヨと小さく誤魔化してしまいながらも、何やら

袖の下で印を組んでいるイルマ。もう即位の式は始まっている。

「このご時世。国防委員長のミウラが立ち会うのは、相応しいかも
しれないのだ」

イルマは意味ありげにニヤリと笑って祈りの言葉を詠唱しだした。
桃矢が聞いたことのない言葉だ。やたら短いセクションで区切る、
珍しい言語だった。

「あれがゼクトール語ですか？」

隣で頭を下げているミウラに、桃矢が小声で聞いた。

「あれは古代ゼクトール語と言うべき真ゼクトール語です。大昔、
この半島に王宮があったのです。王がここに住んでいたときはこの
言葉で会話していたそうです。何代目かの王が、ここを離れたとき、
同時にこの言葉も失ったと聞き及んでいます。今、真ゼクトール語
を話せるのはイルマ様方、ゼクトーラー族だけなのです」

「そこ、うるさいぞ！」

イルマが指さして桃矢達を注意する。

「申し訳ありません！ 甘んじて処罰を受け取ります！」

ホルスターから抜いた拳銃を自分のこめかみに当てるミウラ。

桃矢は、慌てて取り押さえた。組み付いた身体の下で、プニユン
と柔らかい感触が……。

さらに慌てて飛び退く桃矢であった。

11・アンダー・ザ・グラウンド（後書き）

次回、「光に向かって！」

なんとなくフラグ的な副題…。

12・光に向かってダツシュだ！

「まあ、よい。所詮は儀式。意味のないつまらぬもの。これより本番。トーヤ殿！」

クイクイと手を上下させ、赤ら顔の桃矢を呼ぶイルマ。呼ばれるまま進み出た桃矢は、イルマの指示で蛇像の前に立たされた。

九十度に開かれた蛇の口から見える水晶が、黄色いランタンの光を吸収したのか、淡く底光りしていた。

「その玉は『神の目』と呼ばれているものでな。こんな事、予の立場で言つてはならぬのだろうが……」

声の音量とトーンを一つずつ落としていくイルマ。

「おそらく、なんらかの畜光物質が仕込まれておるはずなのだ。予も見たことはないのだが、伝承では赤く光るらしいのだ」

まさに種のない奇跡はない。神官長が一番解っている。種を知るものが詐欺師というが、はたして、そんなんでいいのかと思い、桃矢は苦笑いした。

「後は、トーヤが自分の名前を言つてから覗き込むのだ。そのあと、一通りの説教を垂れてお終い。早く済ませるのだ」

自分の仕事はもう終わり、とばかりに肩を揉みほぐしながら桃矢を急がせる。敵かなムードなどありはしない。

なんだか、想像していた即位式と違うなあと思う桃矢。

歩くのも苦勞する豪華な礼服とカーペットのようなマントを羽織つて、年老いた神官から刀を肩に当てられる。そんなヨーロッパ様式から遠く離れた、ちょー簡素な儀式。

「文化圏と価値観の違いなのだ」
イルマは平然と言い放つ。

「やれやれとばかりに、桃矢はのぞき込む。赤く光ればそれでオツケイ！」

「えーと、芦原桃矢です。よろしくお願いします」

あとは赤く光れば……赤く。

「あのお……青く光ったんだすけど？」

恐る恐る振り向く桃矢。イルマにお伺いを立てる。

「むう？ 青くとな？」

背伸びして水晶玉を覗き込むイルマ。しかし、背が届かない。仕方なくイルマの脇に手を添え、抱っこしてあげる桃矢。

柔らかい手応えと暖かい体温。イルマは、見た目以上に軽かった。

「確かに青いな？ うむ、予の聞き間違いであったか？」

足をプラプラさせたまま、腕を組んで首をかしげるイルマ。

「まあ誰にでも聞き間違いはあるさ」

桃矢は軽く言っただけだが、イルマのプライドを引つ掻くには充分な棘があったようだ。

「トーヤよ、いつまで予を抱っこしておるのだ？ 早く下ろすのだ！」

「あ、ごめんなさい！」

慌ててイルマを下ろす桃矢。

「あらら、桃矢君、年下趣味だったのお？」

こんな場所でも突っ込む事を忘れない桃果。さっそくイタチ目をして桃矢をからかう。

その尻馬にイルマが乗った。

「未成年に手を出すと後がうるさ」

遠くの方で音がした。空気が漏れる時の圧搾音に似ている。

ここは神像が眠る巨大な闇の空間。圧倒的な空域感覚に、四人は固まった。

「た、たぶん、地上でコンプレッサーを動かしたんじゃないかな？」
桃矢が、推理を披露した。紙のような薄っぺらい笑顔を貼り付けて。だって、ここは巨大な四神像しかないじゃないか。

「コンプレッサーと神殿って、なんだか関係遠くくない？」

桃果が一刀両断で否定した。

そして、否定した本人が、一番後悔した。

蛇神像の影が、ランプの光に揺れている。陰影がはっきりしない石像は、どこか神秘的。

「ま、まあ、これで無事儀式も済んだことですし……」

ミウラがホルスターを押さえながら出口を指さす。

「早く地下神殿を出ま」

四人とも、音になり損ねた音を聞いた。一番近い表現をすると耳鳴り。

桃矢は青い顔をしている。

桃果は、誰もいないはずの後ろを激しく何度も振り向いている。

ミウラはホルスターから拳銃を引き抜いて、安全装置に指をかけていた。

イルマは平然とした風情で腕を組んでいるが、顔面からダラダラと汗を流している。

「そうじゃな、あまり長いとジエベルに怒られるかもしれないのだ」
どこか子供っぽいイルマ。しかし、だれもそんな事、気にしてい
なかつた。

「あれ？ この部屋、こんなに明るかつたっけ？」

桃矢が天井を見てポケットと呟いた。部屋全体が青白い。

照明弾でしか見えなかつた四神像のシルエットが、青白く儼かに
浮かび上がっていた。

ランタンの光源は黄色かつたはず。青い光と言えば……。

ゆつくりと、四対八個の目が、水晶球に集まる。

そいつは、さっきより青い光を増していた。

桃果が、出口に向かって、いきなりダッシュした！ 続いてイル
マが逃げた。桃矢の背を押しながらミウラが走る。

みんな黙々と走っていた。

喋るためのエネルギーすら脚力に回して走っていたのだった。

12・光に向かってダッシュだ！（後書き）

次回「昔々」

以後、すくし間、開いてしまいます。

13・昔々の事じゃった。

息せき切って、地下神殿より飛び出してきた四人。女官から差し出された水を、シンクロナイズして飲み干していた。

「何だったんでしょね？ あれ」

後ろを振り返る桃矢。門の向こうに連なる通路は、暗黒の口を開けていた。

「おそらく、先王の遺産なのだ」

どうも、イルマには何か心当たりがあるようだ。

「先王のゼブダが、神殿地下の空いた部屋に、なにやら機材類を持ち込んで工事していた時期があったのだ」

「ふ、ふふん！ 幽霊の正体見たり枯れ尾花つてところね。そんなもんだと思ってたわ！」

二杯目のコップを空にした桃果が、偉そうにふんぞり返っている。

みんなで逃げている最中、彼女の小さい背中が、遠ざかることはあっても近づくことはなかった。あの上り坂である距離をあれだけのスピードを維持したまま走り続けた桃果。この華奢な体の何処に、あれだけのパワーがあったのだろうか？

「いやいや、まてよ。偉そうなこと言ってるが、あの部屋から一番先に逃げ出したのは桃果ではないか、と桃矢は思ったが、後が怖かったので口には出さなかった。」

「何よその目？」

あからさまに非難する桃果の目力に、小さくなる桃矢だった。

「どうせろくな事考えてなかったんでしょ！ それより、先代のオ豚さんはここへ何を運び込んでいたの？」

「豚ではなくゼブダなのだ。……あの者が商社に騙されて買い込んだ、大型の情報処理機器が設置されているのだ。島中にネットワークを張り巡らせるとほざいておつたのだ。結局、宮殿にスペースが無くて、神殿の空き部屋にしまい込んだのだ。どうせ、係の者が電源を入れて点検していたというのがオチなのだ」

皆、一様に肩の力を抜く。正体に予想がつけば何のことはない。

「所詮、タネのない奇跡はないのだ！」

堂々と言い放つイルマに三人の目が集まる。

お前が言うな！

六つの瞳がそう叫んでいたのだった。

「大だいヌル神しんは、この世の全てを造りし巨神。しかし巨大すぎて、人類の世迷いごとはお耳に届かぬ。よって、自らの力を分け与えし神を作られた。世に散らばりし幾多の神は、全て大ヌル神の子。連中は、神と呼ばれしも巨神と呼ばれぬ」

ここは天井が高く、明るい建物の中。

教会だか祈祷所だか、……祈りを捧げる場所に違いなかるうが、……まあそういった所でイルマの即席説教会が開かれている。先ほど、地下神殿で執り行う予定だったアレだ。

「巨神が産み落とせし兄弟神達は、地球上へと散らばった。ある神

々はヨーロッパ半島へ、ある神々はアジアへ。アフリカ大陸、南北アメリカ大陸、オセアニア、そして日本へも。人々をよりよく導くために、数えきれぬほどの神々が散らばったのだ。我らの教典では、この世で神と敬われる存在は、全て元は同じ。全て同じ根源より生まれし者。宗教観のいさかいなど、無知な人間が起こした従兄弟同士の喧嘩なのだ。神々は、さぞや迷惑しておることであろう」

イルマの鼻の穴が膨らんだ。真理を知るものは常に偉そう。テストの正解を知ってる者は、確かに賢いからね、と桃矢は思った。

「で、たまたまゼクトールを担当なされたのが、クシオ様なのだ。地方の神様だからといって縮こまる必要はない。なにせ、四大宗教とは兄弟だから。どの神様に祈っても、最終的に大ヌル神に届くという寸法なのだ」

人差し指をピコピコさせて自慢するイルマ。桃矢は、何かに似ているなと思った。

……新しいゲーム機を買ってもらって、友達に自慢する子供に似ている。

「神話つてのは、えてしてそうだったものよ。で？ ゼクトール創世記の話はあるの？」

いつもの笑顔で先を促す桃果。桃矢は知っている、桃果は投げやりなのだ。どうせ次は創世記の話だろう。早く話を進ませて、一刻も早く終ってほしい。そう考えている。

桃矢も同じ事を考えていたので、口をはさんだりはしなかった。

「元来、人類は世界の頭上に存在した天界で住んでいたのだ。しかし、原初の間人間達がドジを踏んだ結果、天界が壊滅的な被害を受けたのだ。追い出された人々が、天翔る帆船タミアールに乗り組み、

クシオ様に導かれるまま地上に向かった。クシオ様によってタミア
ーラの船長兼水先案内人に指名されたのが、王家の始祖ゼクト神王
打ちのめされた人類が彷徨うこと幾年月。たどり着いたのがこのゼ
クトール島なのだ」

「どうだ恐れ入ったか、とばかりに鼻の穴を膨らますイルマ。誰か
と似ている。桃果だ。」

「神に指名されたにしては、十年も彷徨ったのかよ？」

「醜い権力闘争が目につかぶわ」

桃矢と桃果のひそひそ話が始まった。

「リンゴの話とノアの箱船伝説が混じってるわね？」

「スサノオが高天原を追放になった話も混じってるよ」

桃矢は桃果より、その辺の話に詳しい。

神の話をしたイルマは、胸に手を当て目を閉じて祈る。堂にいつ
た神官長だった。

「そのあとも、ゼクト神王を慕った者共が、いろんな土地から小舟
に乗ってやってきた。神王は懐の深いお方。来る者は拒まずの姿勢
なのだ。ゼクト神王の元、人々は新たな世界を築き上げたのだった。
おしまい」

イルマの話は終わった。

ゼクトール島周辺は滅多に風も吹かず、海域は速い潮が囲ってい
る。周囲数千キロにわたって島もない。十年に一度あるか無いかの
暴風雨に遭遇せねば、遠方への移動は不可能。

それは、暴風に巻き込まれるという事故にあった者で、小数点がつく
生存確率を手にした強運の持ち主だけがゼクトール島へたどり着けた
という意味。

そして、同じ確率を再び叩き出さねば、故郷へ帰れぬと言うこと。いろんな肌の色と、いろんな目の色をした人種が混ざり合ったのだろう。

例えば、外務委員長のサラは、どう見ても生粋の日本人にしか見えない。

ジェベルはゲルマン系の血が濃そうだ。

財務委員長のマールプルはネイティブアメリカンの血が混じった、明らかな混血だ。

そしてミウラに至っては……ミウラの顔と目の色はヨーロッパでよく見るタイプ。そして髪がプラチナゴールド。だが、きめが細かく浅黒い色をした肌はミクロネシア系。どの人種にも分類しにくい。逆に複数の人種の特徴を持っている。

様々な肌と髪と目の色が混ざり合った結果。それがゼクトール人の特徴。

様々な神が融合し、妥協し合った結果、今のゼクトール文化ができあがったのだろう。

桃矢はふと思った。ミウラやマールプル達の素材となる人種は想像がつく。よく知っている人種だ。ところで、「青い肌」をしたイルマはどんな混ざり方をしたのだろう？

ジェベルが儀式ばって頭を下げた。

「さて、これで正式にバルギトル政権は終り、新たにウハウ八政権が誕生いたしました」

「ちよつと待って、ちよつと待って！ ウハウ八政権てなに？」

ジェベルが話した言葉の一部に納得いかず、食らいつく桃矢。

「恐れ多くも前国王陛下の正式名は、ゼブダ・バルギトル・ゼクト

ール。ちなみにミドルネームは母方の姓です。そして、トーヤ陛下の祖祖母様は、キリア・ウハウハ・ゼクトーラ様。名家ウハウハ家の姫様です。よってこれから陛下は、トーヤ・ウハウハ・アシハラ・ゼクトールと名乗っていたく事になります。ちなみに、ウハウハとは日本語で『節度ある人』という意味です」

見つめ合う瞳と瞳。桃矢とジエベル、二人の目である。もつとも、片方は点目であるが。

「なるほど、それでウハウハ政権と！ 響きと意味がともよろしくてよ」

そう言った後、桃果は笑いすぎで呼吸困難に陥ったのだった。

13・昔々の事じゃった。(後書き)

次回「虚弱体質」

感想、募集中〜

お気軽に〜。

14・虚弱体質神

「トーヤ陛下！ 乗り物を用意いたしました。国王即位のお披露目までの間に、ゼクトール各主要施設の観光案内をいたします。どうかお楽しみ下さい」

ジェベルは、レイバンのサングラスをかけ、指先を切ったグローブをはめて立っていた。彼女が用意し、眼前に引き出されてきた乗り物は！

……マウンテンバイクだった。

「ちょっと、ジェベルさん！ なんで自転車漕がなきゃならないのよ！ 車はどうしたのよ、車は？」

前傾姿勢でMBを漕ぐ桃果。これが三度目の愚痴だ。

四人は白い砂が堅く敷き詰められた道を走っている。さほど広くもなく、さりとて狭くもなく、サイクリングには適度な道幅。左右に茂る椰子の森が、日本にない景色だ。

「ほとんどの道は、珊瑚の白い砂でできた未舗装路です。しかも道幅が狭く、大型車の乗り入れはできません。それに十分と走らないうちに、たいていの目的地へ着いてしまいます。ゼクトールで一番使い勝手のよい乗り物は、自転車なのです」

先頭を切って走るのはミウラ。道案内を兼ねた露払いである。その後ろをジェベルと桃果が並んで走っている。桃矢は国王なのに最後尾だった。

しかし、この位置は神の手による配置。

サドルで揺れるミウラの引き締まったヒップ。そしてジェベルの肉感的なヒップ。

それも水着。

黒の小さな布地に包まれた柔らかさそうで温かそうなナニガリズミカルに、左右に分割して動く。

サドルが、桃型のお尻を持ち上げて、また、お尻の弾力が押し返して……。あ、あの皺はなぜできるんだろう？

神様。ゼクトールの神様。名前忘れちゃったけど……。あ、思い出した。クシオ様！ 僕はあなたに宗旨替えいたします。どうか、このまま目的地に永遠に着きませんように！

「それは無理」

どこからか聞こえてきた声にハツとする桃矢。これは空耳か？

だが、どんなものにも必ず終わりがくる。でなければ、新しいことは何も起こらない。

やがて、巨大な建造物が姿を現した。

桃矢の願いも虚しく、クシオ様のパワーが衰退していく。ミウラがブレーキをかけて減速しだしたのだ。

カ一杯手を振っている人がいた。青白ボーダーの水着を着た女の子。見覚えがある。

長く垂らした三つ編み。元気いっぱい、農務委員長ノア・モフモフだ。

「これからご案内させていただくエリアは、我が国の最重要防衛指定施設です」

ここが目的地だった。目的地に着いてしまったのだ！

ノアが束ねる農務委員会は、国内の経済を一手に引き受ける組織でもある。エネルギー政策も、農務委員会の仕事の一環らしい。ノアはエネルギー担当も兼ねていた。

「ゼクトールが誇る、国立中央基幹発電所です！」

ノアが説明したとおり、どう見ても発電施設である。さつきから桃矢と桃果は、口を開けて見上げていた。

巨大なプロペラを頂に持つ、長大な塔がただっ広い草原に一基。風切り音とギア音がやたら大きい。黎明期の一品だ。

「風力発電……ですか？」

「ゼクトールは海拔が低い島です。地球温暖化には神経を尖らせています。これは、いわゆるエコ発電。炭酸ガス排出量ゼロです！」
それはそうなんだが、何か抜けてないか？ 桃矢は激しく疑問を抱く。

「確か、ゼクトールって朝と夕方しか風の吹かない島だったわね？
しかも微風」

桃果がボソリと呟く。神殿がある岬の高台で、ミウラから受けたガイド内容だ。

……それだっ！

「さつきから見てるんだけど……羽がピクリとも動かないんだけど……発電してるの？」

ずっと上空を見上げたままの桃果。

彼女の眉間に皺が寄っている。真剣に心配しているのだ。……この国を。

「不足する電力は、あの副発電所に設置されたディーゼル式発電機でまかっています」

「いや、それエコじゃないから！」

「むしろ、そこが中央発電所ですから！」

桃矢と桃果が真剣に突っ込んだ。

「いえ、でも、京都議定書に沿って気持ちだけでも大切だと思うんです。だって地球温暖化で海面が上昇したら、珊瑚礁でできたゼクトールは海に沈んじゃうんですよ。これ以上、石化燃料を燃やして二酸化炭素を増やしたくないじゃないですか！」

ノアの真面目な気持ちだけは汲めるが、汲んだからといって発電量は増えない。

「で？ 誰がこんなガラクタ買ったの？」

桃果はノアに容赦なく詰め寄る。対して、後ろ向きに下がるノア。「誰に騙されたの？」

大股で詰め寄る桃果。ノアの背中が風車塔に当たる。これ以上さがれない。

「ぜ、前国王が……、日本の四ツ字商事から……」

「うわっ！ 日本の商社に騙されたんだよお！ ごめんよおみんなーっ！」

頭を抱える桃矢。

「騙されるというか……普通、何十基って建てるでしょうに！ 羽が一日中回転したところで、一基だけじゃ大した電力を作れないでしょう？」

「え！ それは本当ですか？」

桃果の言葉に驚く、エネルギー担当委員長のノア。桃果も桃矢にならって頭を抱えた。

二人はゼクトールが……。国家として心より心配だった。

「次はどこよ！ 次はっ？」

立ち漕ぎでマウンテンバイクを駆る桃果。やけくその体^{てい}である。

「次の視察予定部署は空軍です！」

スタンディングで抜重し、ギャップを華麗に飛び越えるミウラ。

ジエベルは準備があると言って先に王宮へ帰っていた。……逃げたのかもしれない。

「事前説明いたします」

先頭でお尻を突き上げ、マウンテンバイクを漕ぐミウラ。後ろを走る桃矢と桃果を振り返りながらの説明が始まった。

「ちょうど編隊飛行訓練が行われている時間です。急げば飛行中の視察に間に合います」

「まさかマスコットネームがミグって言うだけのプロペラ機じゃないでしょうね？」

桃果のチェックが入る。軍視察の移動に自転車を使っているのだ。期待はすまい。

「ジェット戦闘機です！ 中古で購入しましたが、れっきとしたミグ戦闘機です。予算や空軍の規模といった観点から、三機しか運用できませんが！」

反論するミウラ。足に力が入ったのだろう。少しずつスピードが上がっていく。

「三個小隊分は欲しいところだけど……まさか錆が浮いたミグじゃ

ないでしょうね？」

あきらかに桃矢より時間あたりペダル漕ぎ回転数を上げる桃果。声大きい。

ミウラも負けずに声を張り上げる

「炎の女神ファム・ブレイドウ様を模して、赤く塗られた錆一つない機体です。ちなみにチームのコードネームは『赤い三連星』と申します」

「おしいっ！ けど真逆！ そしてビジュアルが心配！」

緩やかな丘を下る白い珊瑚でできた道。ミウラと桃果は並んで突っ走っていく。

二人は、桃矢をブツギリにして走っていった。

こここの神様は虚弱体質なんじゃなかるうか？ と、頭を捻る桃矢であった。

14・虚弱体質神（後書き）

次話「最新鋭戦闘機！」

お話が切り替わります。

15・襲撃！ 新鋭戦闘機！

「確かにミグね」

息を切らしながら桃矢が空港にたどり着いたとき、桃果が空を睨んで唸っていた。

ここは今朝降りた空港だった。たった一つの空港は空軍基地と兼ねているようだ。

近づいてくる金属音に気付く桃矢。南国特有の強烈な日差しを手で遮りながら、青く澄み切った空を見上げる。

轟音と共に頭上を飛び去る三機編成の赤い機体。

「あ、僕あれ知ってる！ 見たことある！ 古い映画に出てた！」

それは、ジェット開発初期の戦闘機。

単発のジェット機関に、直でブーメラン型の翼を取り付けたスタイル。ビジュアル的に言えば、翼の生えた鯉のぼり。

「ミグ17。ベトナム戦争で活躍した戦闘機。ジェットエンジン黎明期の機体よ。よくもまあ、こんな骨董品があったものね？ 空を飛べる地球最後の三機じゃなくて？」

見た目以上に静かな桃果。何かをぐつと堪えているようだ。

「でもさ、性能じゃなくて腕が一番だよ。模擬演習でイーグルを撃ち落としたファントム乗りもいるって話だし」

性格なのだろうか、桃矢は無意識にゼクトール空軍を擁護する。

「ほら見て、みんなすごい腕だよ！ 三機ともワイヤーで繋がっているかのように左へターンして……あ、一機遅れて……ものすごい

遠回りしてる」

なんだか見てるのが怖くなって、目を反らそうとしたけど、反らした先にはもつと怖い顔をした桃果がこっちを睨んでいたの、元に戻した。

「着陸態勢に入りました」

ミウラが空を指さす。

見ると、一機が高度を下げて滑走路に進入してきている。

さっきの編隊飛行を見た桃矢と桃果は、無口になっていた。

無意識にミグの、ひいてはパイロットの無事を祈っていたのだ。

着陸態勢に入ったミグは、滑走路のコンクリすれすれ、機首をわずかに持ち上げ、後輪から接地する。

ズンズンと滑走路を進んでいくミグ。滑走路を全部使うつもりなのだろうか、滑走路の端っこまで来て……一機体分オーバーランして止まった。

すぐさま、地上クルーが駆けつけ、滑走路よりミグを退去。心なしか慌てているように見えるのは、すでに二番機が滑走路への進入行動を開始していたからかもしれない。

手に汗握る桃矢と桃果。生命の危機を感じて息を詰めている。

二機目も無事接地。摩擦熱でタイヤから黒煙が吹き出す。二十メートルもオーバーランして停止。フェンスのない空港が幸いした。

三機目が下降していた。フラップフルダウン、タイヤも出ている。まだ二機目が滑走路から片づいてないのに！ しかも、左ターンに

失敗して大きく旋回していた機体だ。

管制塔はこの機にナニを指示しているのか？ 赤い三連星の機体は無線を積んでいないのか？ 地上クルーは間に合うのか？ 未熟な者から着陸というセオリーは無視か？

ものすごい音がして後輪が接地した。バーストしなかったのが不思議なくらい。しかし、なかなか前輪が接地しない。桃矢と桃果の噛みしめた歯茎に力が入る。無限に続くような数秒が過ぎ、倒れ込むようにしてやっと前輪が接地した。かなり距離を消費してる。滑走路に二番機はない。地上クルーが間に合った！

このクルー、ハンパねえ！ チョーすげえ！ 桃矢と桃果、きつく拳を握っている。

三号機は、すでに空港とは言えない荒地地で無事、翼を休めていた。

ゼクトール空軍機、全機着陸完了！

「ほおーっう！」

長い溜息が二人の口から漏れた。

「なんか、……なんか、こう、長い映画を一本見たような気持ちになってる」

桃矢が汗を拭いたのは、真昼の太陽のせいばかりではない。

さすがの桃果にも疲れが見えた。背中が丸い。

「トーヤ陛下、若鷹達を紹介いたしましょう」

ミウラが手を広げて、赤い三連星チームを迎える。

エンジ色のスーツをまとった者が三人、コンクリで歪む大気の向こう側から、こちらへ走ってくるのが見えた。

パイロットスーツというより、身体のラインが浮き出た革のライダースーツ。小脇に抱えたヘルメットは、どう見ても日本製オフロードバイク用。近代的な装備にはとても見えない。

「小隊長のノイエ・コンチエル少尉、十五才です！」

「副隊長のタマキ・ファタジー准尉、十四才です！」

「隊員のグレース・シンフォ曹長、十三才です！」
揃って敬礼した。やっぱり女の子だった。

みんな元気だ。とにかく元気だ。そして明るい。笑顔が可愛い。胸が大きい。それ以外、彼女らに何を期待すればよいのか？

「まあ、そんな事だろうとは思ってたんだよな」

腕を臍下で交差した丁稚立ちをしている桃矢。

「ちなみに、みなさん飛行時間はどのくらい？」

こめかみを押さえながら桃果が聞いた。頭が痛いのは、遠くの空から聞こえる排気音のせいだけではない。

「ちょうど四十八時間です」

タンポポの様な笑顔を浮かべるノイエ少尉。平和だ。

「わたしは今ので三十時間になりますね」

ニコニコ顔のタマキ准尉。楽しそうだ。

「わたしはまだ十八時間です。二人の足元には及びませんですう」

「ベソをかくグレース曹長。もうどうフォローして良いのかわからない。」

ノイエがグレースの肩を優しく抱く。

「そんなことないわグレース。たった三十時間の差よ。一日ちょっとじゃない！」

タマキもグレースの肩に手を置いた。

「わたしとは十二時間差ね。ちょうど半日よ！」

二人の慰めに顔を上げるグレース。笑顔が戻っている。

「うん！ わたし頑張る！」

三人は堅く手を握りあつたのだった。

「だーあつ！」

両の拳を振り上げ、滑走路の端まで轟く雄叫びを上げる桃果。目が血走っていた。

「ちょっとそこの中学生！ よくもそんな危なげな飛行時間でジエツトに――」

桃果のシャウトは途中で遮られることとなる。

ゼクトール空軍基地兼、国際空港上空に、爆音が轟いた。

桃矢は雷雲を探していた。何の音かと聞かれれば、雷と答えたりう。だが違う。雷鳴なら一瞬である。雷鳴はこれほど長く続かない。

西の空から現れた三機編隊。あの高度であの移動速度。完全に音速を超えている。肺腑を微震動させるこのバリバリ音。固体化した大気を破壊する音なのか？

尖った機首。コクピット下から主翼へ、流れるように張り出したスカート。背の高い二枚の垂直尾翼が特徴的な大型戦闘機。

「あれはフランカー！」

桃果が叫ぶ。

「ケティム海軍マーク確認！」

次いでミウラが叫ぶのと、最新鋭戦闘機が空軍基地上空を通過するのと一緒に消えた。

ブルーグレーに迷彩塗装された三機のフランカーは、二基装備されたエンジンのノズルから薄黒色の排気ガスを散らし、北へ九十度ターン。当然、一機も編隊を乱さない。

さらに左へ九十度ターンし、元来た方向、西の空へと消えていった。

防空サイレンが鳴り響いたのは、姿形、そしてエンジン音までが消え去った後だった。

15・襲撃！ 新鋭戦闘機！（後書き）

次話「ミヨイ島」

戦争です。

「洗いざらい白状なさい！」

王国会議室に桃果の怒声が轟いた。居並ぶ委員長達は、三名を除いて、うなだれたまま自席に座っている。

自分の性格じゃねえ、とばかりに窓の外を向いているエレカと、何を考えているのかどこに焦点を合わせているのかわからないミラ。そして、拳を固く握りしめ、真正面の壁を睨み付けているミウラの三名を除いて。

何かある。彼女たちは、致命的な何かを隠している。桃矢はそう思った。そしてそれは、ゼクトールの領空を簡単に侵した三機の新鋭戦闘機に関係ある。戦闘機が絡む以上、生暖かい部類の問題ではないはずだと。

青い顔をしたミウラが口を開いた。

「実は……、我がゼクトールは」

「わたくしがお話しいたします」

ミウラの言葉を遮ってジェベルが席を立つ。

ニコニコした顔のままだ。

「トーヤ陛下のお役目は、予定通りもうすぐ終わります。終わればあとは、我々の問題です。お二方にはなんの関係もございません」
ジェベルの笑顔はいつもの笑顔。髪の毛ほどの隙もない。だけど無理をしている。

「緊急事態とはいえ、強引な手法でトーヤ陛下を親御様の元からゼ

クトールへお連れしてしまいましたが、それも、すぐにお返しすることが大前提。その条件があればこそ、日本政府と親御様の了承を得られたのです。トーヤ陛下と桃果様お二人は、予定通り明日日本へ帰国していただきます。それが我々の……いえ、わたしの書いた筋書きです。申し訳ありませんでした」

全ては自分の責任だと、深々と頭を下げるジェル。残り八人の委員長も頭を下げた。

「そんなこと聞いてるんじゃないわよ！」

二つの拳でテーブルを叩きつける桃果。眉が危険な角度につり上がっている。このモードへ移項した桃果は手がつけられない。桃矢の十七年にわたる経験から得た知識である。

「桃果ちゃん、そんなふうにならなくても。皆には皆の事情つてものがあらんだろうし」

「バカ桃矢！ だからあんたはお人好しって言われるのよ！」

怒りがこちらに向いた。お人好しと言われて平然としていられるほど桃矢はお人好しではない。しかし、逆らうのは愚作。桃矢は両手を挙げて降参のポーズを取る。

「あれは、威力偵察よ！ 違う？ フランカーはイーグルを凌駕する格闘性能を持ちながら異常なまでの航続距離を有しているわ。だけど、いくら超長距離を飛べるからって、ケティム本国からじゃさすがに燃料が持たない。なのに姿を現した。ってことは近くに滑走路がなくちゃいけないの！ つまり」

ぐるりとみんなの顔を見回す桃果。

「空母が近くの海にいるって事！」

各委員長の顔色が目に見えて寒色系へと変化した。

「空母一隻で軍事行動はできないわ。艦載機を飛ばして偵察行動に出たっことは、ケティムは既に防空駆逐艦やフリゲートを含んだ艦隊を展開し終わっているのよ！」

規模はわからないが、ケティム海軍は、ゼクトールの領海付近で艦隊行動を取っている。そして、真つ昼間から堂々と領空を侵犯してみせた。これは挑発行為に他ならない。

しかも、前国王の死後まもなく、新国王即位式当日の確信犯。最悪の挑発行為である。

政府首脳部は冷静に対処できたとしても、一般民衆の心理面はそうはいかないだろう。

敵の狙いは正しくそれと容易に推測できる。

現にゼクトール軍は対処できなかった。それは国民にゼクトール空軍力の、そして防衛力のなさを知らしめすのに十分なデモンストレーションである。

「ケティムとの間に何が？ なぜゼクトールのような、何も無い国が狙われるの？」

桃果の眉は上がりっぱなし。いまにもジエベルに掴みかからんとする勢いだ。

ジエベルの顔から笑みが消えている。わずかに目が伏せられた。

「あたしはゼクトールが好きなの！ あなた達のお父さんやお兄さんが好きなの！ 出稼ぎに出ている男達に変わって、必死で国を切り盛りしている女性が好きなの！ だからお願い、あたしにも教えて！」

桃果の眉が下がった。背中も丸くなった。

そういえば……、親の離婚という一件もあり、桃果は大家族的な

この国の気質を気に入っていたつけ。桃矢は桃果に感情移入していた。

「国王として何も知りませんでした、では通らないよね？」
桃矢もジエベルに理由をたずねた。

「知らないまま、観光気分で帰国していただければ、と一同考えておりましたが……やはり、お話ししなければなりませんか」

溜息一つ。ジエベルは席を離れ、壁に貼られたゼクトールの地図に歩み寄る。

「神殿をご案内させていただいたとき、遠くにミョーイ島をご覧になられたでしょう？」

「ああ、あの変な形した無人島？」

頭の中に画像を再生する桃矢。綺麗という言葉では表現できない海の色と、黒い直角三角形の島が脳裏に浮かんだ。

「最近、ミョーイ島の沖合で、大規模な海底油田が発見されました。当然、ゼクトールの経済水域内です」

壁に貼られた地図の一点を指し示すジエベル。

「中東の油田に匹敵する埋蔵量が予想されるそうです。この油田が開発されれば、石油枯渇問題を五十年は先送りできるそうです」

「だから岬に立ったとき、オイル臭がしたのか」

桃矢は、綺麗な海にそぐわない匂いを鼻の中に再生する。

「イイじゃないそれ！」

無邪気に喜ぶ桃果。石油が採れる国は例外なく金満国だ。貧乏国ゼクトールも、これで一躍大金持ちになれる。全ての問題が片付くはずだ。

桃矢も桃果のように手放しで喜びたいところだが、そうはいかないらしい。ジエベル達の顔を見ると、胸中に不安感が広がっていく。

「それ自体は喜ばしいことですが、問題が三つばかりございます」「まさか?」

桃果が嫌そうな声を出す。桃矢もだいたい想像がついた。

「一つは、油田を発見したのが、何故か遠い異国のケティムであること」

また面倒な……。それだけで桃矢は、頭が痛くなってきた。

「二つめは、ケティムが……ミヨール島のケティム所属権を主張してきたことです」

「なにそれ?」

桃果、本日二回目のテーブル叩きであった。

16・ミヨール島(後書き)

次回「三つ目」

引き続き感想、お便り募集中！

「第二次世界大戦前まで、ゼクトールは国際世界と交流がなかったんでしょ？ この海域は経済的にも地理的にも利用価値がなかったから、訪れる人も無かったんでしょ？ 諸外国がゼクトールを知らなかったんだから、領土問題なんて発生するはずないでしょう？」

三回、四回とテーブルを叩きつける桃果。彼女の怒りはごもつとも。だがテーブルに罪はない。壊れてしまえば修理に国税が使われる。今の時期、それは避けたい。

桃矢は桃果の腕を押さえた。

「国連とか、公の場に出さなかつたんですか？ 誰が見ても無茶な話です」

理不尽。それは桃矢の一番嫌いな言葉。

「ケティムの方から国連総会に持ち出しやがった。なんでも、ケティムが持つ昔の文書に、ミヨイ島の所有権を当時の国王から譲ってもらったとする一文があつたらしいぜ！」

後頭部で腕を組みながら足をテーブルにのせているエレカが、投げやりに話す。口元に小馬鹿にしたような笑みを浮かべていた。もちろん、バカにする相手はケティム古文書だ。

「なっ！ それなに？ 国際社会でそんな子供だましが通じると思ってるわけ？」

桃矢に押さえられた腕でもがく桃果。確かに馬鹿な話だ。

「ところが、お偉い大国の方々は『それを否定する材料がない』として、反対しなかつた」

自虐的な笑いに変わるエレカ。

「結局、採決が取られたんだが、石油と利権欲しさに目のくらんだ国の方が多かつたって事だな。ほとんどの国が、ミヨール島はケティムの固有領土だと認めやがった」

「なによそれ？ ……わかった！ 金ね？ 金で買われたのね？ 巨額な賄賂事件よ！」

桃果を押しとどめられなくなるのは時間の問題だな、と桃矢は思った。

ジェベルはゆっくりと首を縦に振り、続いてゆっくりと横に振った。

「政治的關係、政治の取引、大国間の利害關係、国連及び各国議會でのロビー活動。そういつたいいろんなカードを沢山持っているのがケティム共和国。対して、我らゼクトールは、国連より、小島嶼開發途上国に認定された小国。援助されることはあつても、こちらから差し出すカードなど一枚もございません。すでに」

言葉を切るジェベル。ある種の感情を鋼の力で抑えている様に見える。

「すでに、ケティムは、我らに無断で油田の試掘を始めているのです！」

珍しく熱のこもったジェベルの説明に、力を込めて聞いている桃果。暴れる方向ではなく、内なる方向へ力を込めて。

「無理が通れば道理は引つ込むの？ 正義はどうしたの？」

血が出るくらいにきつく拳を握りしめる桃果。桃矢は、ここまで感情を露わにできる桃果が羨ましかった。

桃矢の一步先にある、ちょっとした自由。無難な生き方と引き替えに捨てた自由を桃果が持っている。なんだかんだいって桃果に付

き合っている理由の一つがそれ。そんな自由の恩恵にあずかりたかったのだ。

「えてして、国際社会では、正義は力になりません。野蛮な力が正義になることの方が多くでしょう。愛するものがあるかぎり、人は他人に対してどこまでも冷酷に、そして我が儘になれるものなのです。かく言う我々もそう。生き延びるために他人様の血を流すことを厭いません」

ジエベルは元の宰相にもどっている。普段どりの言葉で普段どおりで話した。

「ゼクトールは主立った航路から外れていますし、経済的に深く繋がる国もありません。グローバルな視点で見れば、どうでもいい島なのでしよう。しかし、そんな島でも我らの祖国。何物にも代えられない故里ふるいなのです」

故里。芦原家のある町で生まれ、育った桃矢にはピンと来ない言葉だった。

毎年、夏休みに母の実家へ遊びに行く。実家での母は、違った顔をする。故里とはそんなものだと思っている。でも、そこは母の故里であって桃矢の故里ではない。

「まもなく国連で、ケティムの軍事行動については是非が取り上げられます。もちろん、ケティムから出た議題です。おそらく、ケティムの軍事行動は正当化されるでしょう。それからです、ケティムが行動に出るのは、もう少し先の話です」

ゼクトール人は皆、楽天的な性格の持ち主だ。ジエベルは笑みさえ浮かべていた。

「ゼクトールに乗り入れているたった一つの航空会社は、明日を最

後に乗り入れを見合わせる旨、申し入れてきました。もともと利益率の低い路線です。近い将来、ゼクトール周辺での軍事行動が予期されるためでしょう。明日、午前の飛行機が最後です。その最後の便に、お二人のお席をとっております」

しんと静まりかえる執務室。心なしか、ジェベルの笑みが寂しそうだった。

桃矢も、桃果も声が出なかった。いや、話す言葉が見あたらなかったと言っべきか。

しかし、話せる議題が一つだけ残されていた。

「三つ目の問題は何ですか？」

桃矢が口を開く。問題は最後まで聞いておくものだ。

寂しそうな笑みを浮かべたジェベルが、第三の問題を口にした。「温暖化による水位の上昇です。このままですと十数年後に、ゼクトールは比較的海抜の高い神殿半島の一部を残して、全て水没してしまいます」

これこそ国家存亡の危機。じわじわと真綿で首を締め上げていく、緩やかな滅び。

「小さな海洋国家は全て、海面上昇に怯えています。一方、炭酸ガスの大排出量国である先進国は、効果的な削減策をとってくれませんか。むしろ、迷惑がっている節が見られます。なぜでしょう？ 我々小さな島国よりも、大気と大地を汚す企業からの収益が大事なのでしょうか？」

その、大量排出国の一つである日本から来た桃矢と桃果。

桃矢は、彼女らに言うべき言葉がないことに気付いた。

「同じような問題を抱える小さな島国。特に海抜の低い国々と共闘

しましたが、それは別問題だとして棚上げを喰らいました」

地球温暖化による水位の上昇。テレビの特番やニュースで見た映像が、桃矢の脳裏に浮かんできた。あの時は大して気にかけてなかったけど。

「それはさておき、昼食の時間が大きくずれてしまいましたね。まずは腹ごしらえと致しましょう」

ジェベルが笑顔を浮かべる。うまくはぐらかされてしまった。

ジェベルは元通り、笑顔のジェベルに戻っていたのだった。

17・三つ目(後書き)

次回「エンスウ」

なるべく早くアップしたいと心がけます！

18・エンスウ

「トーヤ陛下。早速ですが、一つ案件を承認していただきたいのです」

「へ？」

やはり出てきたコツテリ味のスパゲティを食べ終え、食後のココナツジューズを飲み干したときだった。ジェベルが申し訳なさそうな顔をして、桃矢に話を持ちかけてきた。

「国の政治を司る者達が入れ替わったように、ある一定以上の要職に就く担当者も入れ替わります。そこで」

ジェベルの合図で、外務委員長のサラがドアの向こうに手招きをした。現れたのは、黒髪の小さな少女。二カ所で束ねた長い髪を両脇に垂らしている。

「初めまして、トーヤ陛下。エンスウ・シャオンです」

ペコリと頭を下げるエンスウ。ツインテールの長い髪がピヨコンと揺れる。黒目がちの大きい目ながら、オドオドとした瞳。顔つきといい体つきといい、まだまだ子供だ。

要職である証拠に、例の水着型制服を着ていた。

……水着が要職の証つてもナニだが。

「エンスウはわたしと同じ十三才です」

こつちもたどたどしく喋るサラ。エンスウと良いコンビだ。

桃矢は二人を微笑ましく思った。ちびこい二人が並んで立っていると、小学校の発表会のように見えたからだ。

サラによるエンスウの紹介が続く。

「エンスウのシャオン家は代々、わたしのプワプワ家に仕える家柄ですが、わたしたちは親友です！」

小さい拳を握りしめ、頬を紅潮させているサラ。そのまま黙っている。

桃矢は理解した。サラが、これで解るだろうと思っているのを理解した。

「それで？」

そんなんで解るわけないので、より詳しい説明を促した。

「国連大使は、国王もしくは外務委員長が選定し、国王がそれを承認します！」

桃矢は、おそらく正解であろう嫌な予感がした。嫌な予感と言うより、不安と言った方が良いかもしれない。

「トーヤ陛下！　どうか、国連大使拝命の件、承認お願いします！」
エンスウが勢いよく頭を下げた。ぴよこんと跳びはねる髪の毛の束に、桃矢の不安がいつそうかき立てられる。

「いや、あの……エンスウちゃん、十三才なんですよ？」

「ゼクトールの法律では、十三才で成人とされております」

答えたのはジェベル。未成年就労防止法とかすつ飛ばす、にこやかな顔がなんか怖い。

「エンスウちゃん、経験あるの？」

「不足分は若さで補います！」

その若さはいかなものだろうか？

「インスウちゃん、経験、ないんだ……。多分、国外に出たこともないんだろっな……。桃矢は不安を通り越し、逆に冷静になりつつあった。」

「危険……なんじゃない？」

「これは、妹の一人旅を心配する兄の気分だろうなと桃矢は思った。」

「インスウは俺のたった一人の妹だ！俺がついてるかぎり、誰にも指一本触れさせん！」

「いつの間に入ってきたのか。インスウによく似た顔立ちの少年が、泣きそうな顔をして立っていた。」

「お兄ちゃん！」

「ご、ご兄妹ですか？つーか、なんで兄じゃなくて妹が国連大使を？」

「思考能力が低下してしまった桃矢。体に悪い方の汗が、頬に一筋流れている。」

「彼は兄のパオロン。役職は大使付きの武官です。彼は十五才。あと一年もすれば海外へ出稼ぎに出てしまいます。そのような者に、国の要職は勤まりません」

「相変わらずにこやかなジエベル。しかし、心の中は……。それくらい桃矢にも解る。」

「良くも悪くも、ケティムとの問題は短期間で終わる。俺が出稼ぎに出るまでには終わっている。だから、俺は……妹を……」

「言葉が出て来なくなったパオロン。あとは腕でゴシゴシと目の周りをこするだけ。」

「彼も、今のゼクトールを取り巻く焦臭い匂いを嗅いだ一人なのだ。」

国連は第二の戦場になるであろう。いろんな力や不思議な取引が飛び交う魔界のような国連本部に、たった一人の妹が向かおうとしている。

それを承認しろと言う。一泊二日の王として。

「でもちよつと……」

桃矢の心境はこうだ。わかるけどわかりたくない。

「桃矢！」

いきなり桃果が叫ぶ。

「へっ？」

驚いた桃矢。ろくな返事もできなかった。

「『へ』じゃない！ 返事は『ハイ』でしょ？」

「ハイ！」

桃矢の返事に、にんまりと笑う桃果。

「『ハイ』は肯定の返事。桃矢陛下は承認なされました」

「桃果ちゃんずるい！」

思い切りの悪い桃矢の後を小気味よく押す桃果。小さい頃からのパターンだ。

「では、ここにサインを」

信任状下部の大きな空きスペースを指さすジェベル。手渡されたペンで、隅っこに小さく名前を書き込む桃矢。日本語で書いてしまった。

「どうかご心配なく。国連大使の重責、このエンスウ・シャオロン、命をかけて全ういたします！」

目にいっぱい涙を浮かべ、唇を振るわすエンスウ。

どう受け取っていいのか、桃矢にはわからない。まさかとは思う

が、片道切符のつもりなんじゃなかるうか？

「心配するなって言われても……」

この状況。いろんな意味で、心配しない方がおかしい。

「万が一、ご期待に応えられなかった場合は、国際連合本部ビルを枕に討ち死にしてみせましょう！」

上着を開いてみせるエンスウ。膨らんだ内ポケットから、導火線が顔を出していた。

「いやいやいや、それ駄目だから！」

手振りを混ぜて止めに入る桃矢。ひいたばかりの脂汗が、また流れ出した。

「よく言ったエンスウ！ その時はお前一人じゃない！ お兄ちゃんも一緒だぞ！」

エンスウの小さい手を両手で握るパオロン。彼の上着からも細長い紐が飛び出している。

「いや、だからそれは自爆テロ以外の何ものでもないって！」

桃矢は、この国の教育方針が心配になってきていた。

「エンスウ、失敗は万が一にも許されません。でも万が一の時は、わたしもこの世にいないでしょう！」

エンスウとパオロンの手に、自分の手をかぶせるサラ。既に号泣している。

「まだその話題で引つ張るんですかい！」

もうどうにかしてほしかった。どこかにいる水着の神様、どうかこの状況を改善してください。桃矢は祈った。

しかし、負け癖のついた神に祈っても仕方ないので、まともな人物に頼る事にした。

ジェベルは、いや、ここに女の子達は、窓の外を見つめているミラ以外、みんなもらい泣きしていた。ミウラも顔を伏せて肩を振らせている。

桃果も顔を伏せて肩を振るわせていたが……こっちはたぶん笑っているはずだ。

もうどうしようもない。桃矢は力むのをやめた。みんなと同じ方向を向こうと決めた。

なにせ、幼馴染みがあつた桃果なのだ。流されるのは得意だ。

「じゃあこうしよう。エンスウちゃん、全身全霊をもって任務に当たってください」

桃矢の言葉に、直立不動の姿勢を取るサラとパオロン。二人は涙を無理に止めた。

エンスウだけ泣いていない。水っぱい目をしているが、泣いてない。泣いてはいけない人だからだ。

「頑張るだけ頑張つて、それでも駄目だったら、その時はお兄ちゃんと一緒に戻ってくればいいから！」

桃矢はそんな風に声をかけた。

みるみる間に、エンスウの下まぶたに涙がたまる。

「絶対に死んではいけません。生きて帰ってきてください。これは命令！」

エンスウの左目から涙がこぼれた。右目からも涙がこぼれた。堰を切つて涙が流れ出す。

声は出さない。出したら泣いたことになるからだ。口をグニグニにして堪える。

上をむいて、歯を食いしばるだけ食いしばって、嗚咽を飲み込ん

だ。

次に顔を戻したとき、エンスウは笑っていた。マーガレットのよ
うな可憐な笑顔だった。

「トーヤ陛下、行って参ります」

桃矢は返事をしなければならぬ。その言葉は一つしかなかった。
「行ってらっしゃい。気をつけて」

直立不動で敬礼するエンスウ。そして部屋を出て行った。

「なかなかの落とし方ね。ま、桃矢じゃこんなもんでしょ」

フォークをピコピコさせながら、優しく笑っている桃果。たしか
に、彼女の言うように、その場だけを切り取ると、大げさな一幕だ
った。

「ところで」

桃果は周囲を見渡した。

手に手にハンカチを持って目に当てている少女達。マープルを中
心にアムル、ノア、サラが互いの肩を抱いている。眼を真っ赤にし
たジムルは、必死に冷静さを装っていた。

エレカは「なんだよ！ いいヤツじゃねえか！」と盛んにブツブ
ツ言いながら、向こうを向いて肩を振るわせている。

ジェベルは嬉し泣きなのだろうか？ ハンカチを目尻に当て、笑
顔で泣いている。

ミラは……ぼーっとした目で、こんどは空になった皿を見ていた。
ミウラはきつく目をつぶり、エンスウに敬礼している。口元が微
妙に震えていた。

桃矢も目頭を押さえている。

「この湿っぽい空気をどうしてくれようか？」

桃果は、左手にスプーン、右手にフォークを持った両手をワナワナと震わせていたのだった。

18・エンスウ（後書き）

次回「居残り組と帰宅組」

生暖かく待て！

19・居残り組と帰宅組

「なんか……こう……変な感じだよね。照れくさいというか、出来レースというか」

宮殿中庭に集まって歓声を上げている国民に対し、王宮最上階に設けられたベランダより手を振り続ける桃矢である。……王宮最上階について、宮殿自体が二階建てでしかないから、二階のベランダから手を振っているといった体である。

「かりにも、王として国民の声に答えなきゃ。いわゆるロイヤルデューティーってやつ？」

ゼクトールの女性は皆美しい。そして集まった国民の九割方が女の子だった。

これだけの人数が、そろって桃矢の名を叫んでいる。内、八割方が踊っている。

「桃矢、鼻の下、鼻の下！」
後方で桃果が笑っていた。

結局、ケティムの領空侵犯もあって、パレードは中止された。代わって、王宮でのお披露目となったのだ。

桃矢の心中は穏やかでない。

新しい国王を無邪気に歓迎する国民。あんな出来事があったにもかかわらず、ゼクトールの国民が大挙して集まってきた。お祭り騒ぎだ。

しかし、桃矢は、いわば傭われ国王。新しい国政スタッフを承認するだけの役目。

その後、国連大使のインスウ以外も何名か、国の重要ポストに就

く少女達の着任を言われるがまま承認した。全てジェベルやミウラ、その他各部の委員長が選んだ少女達。

桃矢が自分の意思で選んだわけではない。

同年代の少女達が一樣に眉を吊り上げ、暗い未来が待っている戦いに進んでいく。その子達の背中を押す役目を桃矢が担う。

そして桃矢は明日、ゼクトールを離れ、日本に帰る。国民はその事を知っているのだろうか？ どうにも割り切れない余りが気になっただけでしかたなかったのだった。

お祭り騒ぎは深夜にまで及んだ。

直接、床に座るゼクトール式晩餐会だった。

ゼクトールの郷土料理が大皿に盛られてだされた。

茹でたブレードフルーツは栗に似て、とても甘い。椰子蜜をかけて食べるのだ。薄くスライスして油で揚げたポテチ風もなかなかいける。

熟したヤシの実をココナッツクリームで甘く煮たヤシリンゴは、桃果のお気に入りだ。怖いくらいに手を出している。

変わったところで、カツオとマグロの刺身が出ていた。刺身と言っても日本風ではない。ココナッツクリームであえてある。

これがおいしい。コナッツクリームと魚介類の相性は最高だ。

他にも、タピオカ芋のココナッツクリーム煮や、珊瑚礁で捕れた魚のフライ。ココヤシの実と焼き魚のあえもの。すべてが椰子の木絡みの料理。

南海の孤島ゼクトール。椰子の木が生えてさえいれば、一生食う

に困らない国。

そして、料理のメインは豚の丸焼き。これの存在感は大きい。

ココナッツを餌に育てられた豚は柔らかくて美味しかった。小手先の技で育てた自称高級豚など、ココナッツ豚の足元にも及ばない。あんな豚とは種族が違う。

そんなこんなで、ゼクトール各地の有力者と挨拶を交わしながらの晩餐会だった。

思った通り、有力者達は女の子ばかり。

幼女からOL風お姉様まで、みな正装で集まっていた。

正装とはもちろん、水着のことである。

和やかな晩餐会であったが、どうにもまぶたが重い。拉致られてからこつち、桃矢はほとんど寝てない。

そんな桃矢の様子を見かねたジエベルが、早めに引き上げさせてくれたのだ。

勢いのないシャワーだけの風呂に入って、ベッド潜り込んだのだが、なぜか寝付けない。

ふと見ると、窓が大きく開いている。

桃矢は窓から外へ出てみた。靴は履いていない。

裸足で歩くのは久しぶりだ。足の裏がチクチクと痛痒い。それがまた新鮮な感覚だった。

たいした警護などしていない王宮。誰の目にも触れることなく易々と外へ出られた。

宮殿を抜け出した桃矢は、裏の浜辺でしゃがみ込んでいた。ゼクトールは小さな島だ。どこからでもすぐに浜辺へ出られる。

ぶらぶらと、波打ち際を歩いてみた。濡れた砂は引き締まっ
て、結構歩きやすい。

昔はもつと遠くまで浜が続いていたとジェベルさんは言っていた。
海面上昇で、海が迫っているのだ。

そんなこと関係無しに、寄せては返す波の音が心地よい。
寄せては返し、返しては寄せる。
海が生まれた遠い過去から、永劫に続いてきた単純作業。

月は出ていなかったが、足元は仄かに明るかった。日本では、田
舎ですら見られない、ものすごい星の量が照明になっていたのだ。
今にも音が聞こえてきそうな星空が、桃矢を異世界へ誘っ（いざ
な）ている。

遠くで鳴る爆竹の音が、桃矢を浮き世へと引き戻す。なんとなく
銃声っぽく聞こえたが、たぶん気のせいだろう。

町の中心部から聞こえてくる音楽と歌声。お祭りの定番はどこ
の国も一緒だ。

戦争になるかもしれないというのに、この明るさはなんだ？

明日はこの国を離れる。離れないとヤバイことになる。ここに来
たのは自分の意思じゃない。むしろこちらが被害者だ。

だのに、なんなのだろう、この罪悪感は何？

自分がここにいたって、なんの役にも立たないというのに。

人が一人、砂浜に立っていた。

夏の制服を着た少女。桃果だ。

背中まで伸びた長い髪。その湿度からみて、桃果もシャワーを使

ったのだろう。

桃矢に気付いた桃果が振り向く。

「夜になると、ちよつとは風が吹くみたいね。窓を開け放てば涼しく寝れそう」

寝られないから外に出てきたのだらうに。

桃果は、桃矢から視線を外し、遠く夜空を見つめた。南国の星空を楽しんでいる。

「ほら、あれ南十字星じゃない？ あれ？ 大きいのと小さいのが二つあるけど、どっちが本物かしら？」

違和を感じる桃果の笑顔。唇の表情が嘘っぽかった。

おしゃべりな彼女が、それっきり口をつぐんだままなのがその証拠。

腹に何か持っている。だけど、決して自分から切り出さない。桃矢から話を始めなければならぬ、ということだ。

だけど、桃矢にだっておしゃべりに興じたくない時もある。今夜のような、沈んだ気分の時がそうだ。口を真一文字に結んで、意地を張った。

あまりに長い間、桃矢が切り出さないでいるので、桃果がチラリチラリと桃矢に視線を送る。いつものように怒っている風ではない。どこか寂しげな、それでいて可愛らしい仕種。

桃矢は、軽く息を吐かざるを得なかった。

お芝居とわかっていても、ついつい乗ってしまう桃矢だった。

「明日の今頃は家に帰れてるかな？ 色々あったけどさ、結局ジエベルさん達の掌で（てのひら）踊ってただけだったよね。それにさあ、現実離れしすぎていて、なんだか夢を見ているような気がしてならないんだけど。桃果ちゃん、そこんどこどうよ？」

「夢の王国……よね」

よくできました。と桃果の顔に文字が浮き出る。

でもにっこりと笑う桃果は可愛い。ああ、ちくしょう、と思いな
がらも、ついつい笑みを浮かべてしまう桃矢だった。

「あたしね、ゼクトールに残ろうと思うの」

「……なんですと？」

耳を疑った。続いて言語理解力を疑った。まじまじと桃果を見つ
める桃矢。

「この国に残るの。でも桃矢はこのまま帰りなさい」

口を開けたまま固まっていることに気付いた桃矢。傍から見ると
相当間抜けな顔だろう。

「いや、でも、戦争が始まるよ！ 明日の飛行機が最後だし、空母
が近くにいますし！」

指をあちこちに向けながら支離滅裂になっていく桃矢。残ってい
たいどうするのか？

「桃矢は仮にも王様なんだから、ケティム軍に占領されたときに殺
されるかもよ」

後ろに手を回し、腰をくねらせて足位置を調整した桃果。大人の
女の人みたいだ。

「それをいうなら、桃果ちゃんだって危ないじゃないか！」

「違うのよ」

子供を優しく諭すような笑みの桃果。こんな寂しい笑顔を見たの
は初めてだった。

「あたしは日本人観光客。運悪く戦争に巻き込まれただけ」

「それだったら僕も」

桃矢はそこで次の言葉を失った。

桃果が言っていたある事を思い出した。

もうすぐ彼女の家族はバラバラになる。家庭を顧みない父。自分が大事な母。桃果の求めとは乖離した家族像。そしてゼクトールで見た理想の家族愛。

桃果はここに自分の家を見つけていた。日本の家に無いものがここには有る。

桃果は日本へ帰りたくない。でも、桃矢は帰りたい。桃果と一緒に帰りたい。

だがそれは、桃果の気持ちを見捨てた桃矢のエゴ。自分の気持ちを安定させるためのアイテム、それが桃果。

桃矢は言葉に詰まった。いまさら「帰らない」なんて言っても、本気で言ってるのは彼女も思ってくれないだろう。事実、桃矢は帰りたい。本当に帰りたい。

だから、よけい桃果と一緒に日本へ帰ろうなんて言えない。

そして、……次の答えに至ったのが悲しかった。

いつか再び桃果と再会できても、もう、今までのような関係には戻れないだろう。

生きる道筋が違った二人の男女としての再会。

そんなの嫌だ！

だが、桃果を連れて帰りたいと思う気持ちは、自分だけが幸せに

なるうとする醜い心。今、桃果が一番ナイーブに感じている問題。たとえ、力づくで連れ帰ったとしても、二人の間には修復しがたい深い溝ができる。

結局、二人各々が進む道は一つしかない。違う二つの方向なのに、道はたった一つ。

他に道はない。桃矢は飛行機に乗る。それがお互い、最も被害の少ない道。

「安心して、桃矢。あたしが死ぬはずないわ。あたしのしぶとさは、桃矢が一番わかっているはずよ。桃矢と違って、うまく立ち回れる自信もあるし能力もある」

桃果が桃矢の胸に手を置いた。桃果の目が。

「だから、心配しないで。一段落付いたら帰るから。また一緒に学校へ行けるわよ。だから、桃矢、わたしのわがまを聞いて！お願い桃矢！」

それは間違いだ。元通りにはならない。桃果は日本へ帰ってこない。二人の関係は壊れる。

後ろずさりながら、そっと手を離し、桃矢から離れる桃果。いつもの営業スマイル。

「じゃ、お休みなさい。寝る前にオシッコ行つとくのよ！」
また違和を感じる笑顔。いつもの太陽のような笑顔じゃない。月のような美しい笑顔。

桃矢が口をはさむ間もなく桃果は走り出し、闇の中へ消えていったのだった。

19・居残り組と帰宅組（後書き）

次回「醜いエゴ」

桃果ちゃん、かむばーっく！

20・醜いエロ

「じゃ、ここでサヨウナラということだ」

翌朝、王宮の敷地を一步出たところ。リュックを背負った桃矢が、自転車に跨っていた。

身一つで来たのに、帰りはお土産やら記念品やら寄せ書きやらで荷物が増えていた。

「何もわざわざ自転車を使わなくとも……。車でお送りいたしましたのに」

ジエベルが申し訳なさそうに眉を下げる。

「いえ、あの、ガソリンを節約した方がいいと思って……。これ位しか協力できないし。それに、空港まで歩いてでもいける距離だし」
桃矢も申し訳なさそうに、ペコペコと頭を下げている。

これでお別れ……。

「色々が悪かったと思ってるよ……。いや、思ってます、陛下。ゼクトールが平和になったら遊びに来てくれよな、……。じゃなくて、来て下さいね」

エレカが手を振る。

お嬢様育ちのジムルが優雅に頭を下げる。アムルが、ノアが、サラが、目と鼻を真っ赤にしている。ミラは西の空を見上げていた。

王宮職員の女の子、宮廷料理人の老巨人。みんなが見送りに来てくれていた。桃矢に向かって口々に感謝の言葉を述べ、心から名残を惜しんでくれた。

みんなの端っこで、桃果が笑っていた。……夕べの星空のように明るい笑顔。

その後、桃果はジェル達にねじ込んだのだ。実際、ゼクトールの誰よりも敵艦隊装備に詳しくかった。ジェルに対し、国防委員長のミウラが、桃果の居残りを強く押したのだ。

桃矢と桃果の視線が空中で、運命の糸のように絡み合った。桃果の目が何かを言っていた。具体的な言葉はわからない。でも、別れの言葉であることだけはわかった。

とても寂しい言葉だった。

いつもと違うのは、桃果から目をそらしたこと。

絡んだ糸は解れた。

潮時である。

「じゃ、キリがないからこの辺で」

もう一度、誰にともなく手を挙げて、別れの挨拶をする桃矢。

「ミウラ委員長、陛下を無事空港までお連れするのよ」

水っぽい目を隠すように、アンダーフレームをクイと上げるマーブル。いつもより偉そうな言葉遣いだ。

「わかっている！ わたしがお迎えに上がったのだ。わたしが最後までお見送りしないでどうするっていうのだ！」

ミウラが桃矢を促し、先に走り出す。

続いて走り出す桃矢。三回ペダルを漕いで振り向いた。

みんな、まだ手を振っていた。

桃果は……門柱にもたれるようにして立っていた。

桃矢が振り返ったので、姿勢を正した。いかにも元気があるように見える、月の笑顔。

桃矢は太陽を無くしてしまった。

自分の道を走ろう。

そして、桃矢は前を向いて、空港への道を走り出したのだった。

空港へと続く白い道。朝の空は、どこまでも青く綺麗に澄んでいた。先導するミウラの形よいお尻。しかし、桃矢の心を動かすには力不足だった。

南国特有の白い家々が並ぶ街並み。

窓の造りが大きく、風通しがいいように全て開けはなっている。

朝の支度をしているのだろう。女の子達が忙しく動き回っているのがよく見える。

この子達はこれからどうなるのだろうか？

僕のように、この島から逃げ出すこともできない。そして仮にも王だった僕一人が、安全な場所へと逃げ出している。その事をこの子達は知らないだろう。

それを知ったら、きっと僕のことを恨むだろうな。でも僕だって知らずに連れてこられたんだ。どこまでも損な役回りだよな。どうせ僕はそんな……。

白い板塀の家から、少女が元気よく飛び出してきた。見通しがよかつたおかげで、前もってブレーキをかける準備が出来ていた。ミウラと桃矢は余裕を持って減速する。

漁に出るのだろうか？ よく日に焼けた少女は、釣り具と水筒を持っていた。

彼女は桃矢を見て驚いたのか、目を丸くして棒立ちになっている。

「アイヤウエイ！ トーヤ陛下下！」

少女が叫ぶ。

しまった、逃げ出すのがバレたか？

一番嫌なシーンが展開される予感に、桃矢は空を見上げた。

「トーヤ陛下、あがりとうございませう！ どうかお元気デ！」

日に焼けた少女は、たどたどしい日本語で声をかけペコリと頭を下げる。妙な違和感。

難なく少女を迂回し、走り去るミウラ。その平然とした態度に疑問を感じる桃矢。

「あの、ミウラさん！」

「なにか？」

顔だけ振り返るミウラ。特に緊張した様子もない。

「あの子、僕がゼクトールから離れることを知ってるみたいですが？」

「知ってますよ。この国中の者共は、トーヤ陛下の役割を全て理解しております」

振り返る桃矢。

少女の声に桃矢の通過を知ったのだろう。家々から女の子達が、バラバラと表に出てくるところだった。

口々に桃矢の名を出し、笑顔で手を振っていた。みんな底抜けに明るい顔をしていた。

みんな、サヨウナラと言っていた。

「トーヤ陛下の滞在日程も、陛下が無理やり連れてこられたことも、陛下が元々この国とは関係ない平和な生活を送られてきたことも、全ての国民が存じ上げております。ケティムとの面倒ごともしっかり知っています。知った上でトーヤ陛下をお迎えし、トーヤ陛下をお見送りしているのです」

目を丸く見開く桃矢。

桃矢はスピードを上げ、ミウラに追いつき併走する。ミウラの顔をまじまじと見る桃矢。

「でも僕は、たった一人でこの国から逃げるんだよ！ みんな僕のことを怒ってるんじゃないか？」

今度は、ミウラが大きく目を見開いた。

「何をおっしゃってるんですか！ 詫びなければならぬのは我々です。トーヤ陛下の方こそお怒りでしょうに！」

「なんで、怒んなきゃならないのさ？」

ミウラはしばらく口を開かなかった。前を見てゆっくとペダルを漕いでいた。

「トーヤ陛下は、どこまでもお人好しでおられる」
ボソリと呟くミウラ。

さすがにムツと来た桃矢は、言い返してやろうと口を開く。

「だから桃果様はトーヤ陛下のことが好きなのでしょう。……少

し妬けてしまいます」

桃矢より早く口を開いていたミウラの一言が、彼を黙らせた。

無言で走っていく二人。

流れていく島の景色。

道の右側に、背の高い椰子の木で形成された森。左手に見える、珊瑚礁が作ったエメラルドの海。現実を感じさせない平和な風景。どこまでも白い道は続く。

やがて二つめの村に入った。

全国民が桃矢の行動日程を知っている。それは本当だった。

全ての家から人が出ている。

九割方が老若の女性。残りが年老いた男と年端もいかない男の子。皆一様に手を振っている。皆一様に、明るく微笑んでいる。

「トーヤ陛下、ご苦労様でした」

日本語で書かれた横断幕まで上がっている。

さっきの村の女の子と一緒に。口々に桃矢の名を叫び、感謝の言葉と詫びの言葉、そして桃矢の身の安全を願う言葉を唱えている。

年老いた者達は祈りの形に手を組み、涙まで流している者もいた。

桃矢の心中は複雑だった。気持ちの区分けができていないと言った方がよいだろう。

村の中を通る道を自転車で走る桃矢。窓から身を乗り出す老人、一緒になって走り出す子供。みんな笑顔だ。みんな陽気な人たちだ。自分たちの身に降りかかる不幸を知らない者はいないはず。

前方と両脇に人がいなくなった。村を抜けたのだ。振り返ると、村の出口に集まった人々が手を振って別れを告げていた。

小さい島国だ。どこへ行くのも自転車で事足りるような国だ。村を抜けるとすぐに空港だった。フライトの時間に、余裕で間に合うだろう。

「参りましょう、陛下」

ミウラの言葉に桃矢の涙腺が切れた。

涙を見られぬよう彼女を抜き去り、全力で自転車を走らせた。力の限りペダルを漕いだ。漕いでも漕いでも涙が溢れてくる。ミウラが追いつけない速度を出す桃矢。おそらく二度とこの記録は破れないだろう。

そんなスピードで走るものだから、道の窪みに前輪を取られると拳動が激しい。

桃矢は縦回転しながら宙を飛んだ。頭が下で足が上。太陽が目に入り、網膜を焼く。

太陽はそこで輝いている。しかし、それは桃矢の太陽ではない。

僕は、太陽に顔を向けられるだろうか？ 再び太陽に巡り会う資格はあるのだろうか？

一回転したところで、桃矢から何かが抜けた。

何が抜けたところで物理法則は変わらない。白い珊瑚の砂を敷き詰めたゼクトールの大地が桃矢に近づいてくる。

桃矢は激しく地面に叩きつけられた。膝を擦りむいたみたいだが、確かめもしない。転がった自転車を立てて跨り、ペダルをこぎ出す。だが、自転車は動かない。壊れていた。

直らない故障ではない。ただ単にチェーンが外れていただけだ。こんな何度も経験している。子供の頃はいざ知らず、今ではすぐに直せる。トラブルの内に入らない。

たつぷり潤滑油が染みこんだチェーンに指をかけ、スプロケットに沿わせてペダルを逆回転。確かな音を立て、チェーンが元の位置に戻る。手が汚れたが、それがいかほどの物なのか？ シャツの裾でも拭いて落とせばいい。簡単だ。

問題は手とシャツを汚す勇氣があるかどうかだけ。

一気に飛び乗る桃矢。後ろを振り向かず、前に向かって自転車を走らせる。全速力で。

「トーヤ様！」
背後でミウラが叫ぶ。

振り返る桃矢の目を見て、ミウラが黙り込んだ。
なぜなら、桃矢の目は、何かを捨てた目だったからだ。

捨てた事によって空いた手が、別の何かをつかんでしまった。そんな目だった

「僕はもう戻らない。だって、愛って、究極のエゴなんだからさ！」

桃矢は、自分の決めた道を振り向くことなく走った。

その彼の目に、涙は流れていないのだった。

20・醜いエロ(後書き)

次回「キングダム」

携帯、トイレに落とした…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0753z/>

悪役上等！ 武装戦闘国家ゼクトール

2011年12月24日12時52分発行